



第69回特攻平和観音年次法要の開始を待つ特攻観音堂



第132号

公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会

編集人 金子敬志  
 発行人 石井光政  
 印刷所 島根印刷株式会社

目次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 理事長 藤田幸生 2

第69回特攻平和観音年次法要

法要状況報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 編集長 金子敬志 3

特攻平和観音経・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 世田谷山観音寺住職 太田恵淳 4

特攻平和観音経の解説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 保坂世田谷区長寄稿文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 佐藤まさひさ・宇都隆史議員寄稿文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

保坂世田谷区長寄稿文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

佐藤まさひさ・宇都隆史議員寄稿文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

会員等投稿

義烈空挺隊の出撃に思う・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 理事 岡部俊哉 9

海上挺進第16戦隊及び基地第16大隊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 中溝二郎 12

ルバン島の戦い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 第二戦隊員 儀同保 15

海上挺進第17戦隊及び基地第17大隊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 中溝二郎 19

帰ってきた陣中日誌 ルソン戦記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 第十七戦隊 石井不二郎 22

漂流記 生と死の境に生きて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 第十七戦隊 浜 慎人 31

元特攻隊長・堀山久生さんを偲ぶ

「桶川飛行学校平和祈念館」開館式・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 理事 加藤 拓 38

連載 山ある記12・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 白田智子 43

文芸欄 歌俳柳の広場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 池田康博 44

短歌・俳句・川柳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

事務局からの報告等

特別攻撃隊全史第二版出版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

会報一三二号（8月号）記事の訂正・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

住所等の変更について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

年会費及び寄付金の税額控除・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

寄付者等の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

挿絵提供 空自OB 宇山氏 会員 荒木氏

## 「巻頭言」

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長

藤田 幸生



## コロナの後を想う！

日本の「名主、庄屋、代官、領主、大名、将軍家、天皇家」も、領民から「年貢等」を、徴収していました。それは、外国の王家・領主と、同じでした。

しかし、それは、よく有るように「私腹を肥やすため」では、ありませんでした。それは、事有る時に、領民、住民を、敵や、災害等から、守るためでした。

祖母から聴いた話では、天皇家の子供達は、学校で6色の色鉛筆しか、使わなかったそうです。質素だったとか！御学友達は、12色、24色を使っていたそうですが・・・！

また、庶民でも、お百姓の庄屋さん、飢饉、津波等の時、小作達のために、平年、徴収し、米倉に備蓄していた食料を、放出したそうです。種米は、どんなことがあっても確保して小作に与え、生き延びたそうです。漁師の網元も、同じ精神だったようです。

このお話からも、「日本は、上から下まで、他を思いやる和の精神に、貫かれていた。」ことがわかります。「それが、古来の日本社会だったのです。」

現在の、日本のある党のように、「自分が！自分が！我が、我が・・・！」で、「自分の利益と権利のみを追求主張するような主義主張」は、古来、日本では、「是」とされてこなかったのです。

「自分の食は、我慢してでも、困っている相手の人に尽くす！」和の精神を、「是」としてきたのです。

これこそが、日本の強さの秘訣でした。世の中が、如何に変わろうとも、この風土に根ざした価値観は、変わりません。

祖先達が紡いできた、2000年の日本の歴史が、それを、証明しています。

これが、「日本精神」です。その精神が、世界に例のない「特攻隊」を、生んだのだと想います。

今回のコロナ危機の後にやってくる世界は、どのような世界になるのでしょうか？皆が、固唾をのんで見守っています。私は、日本こそ、その世界をリードする資格があると、思えてくるのです。その訳は、この故であります。

私は、未来を、そんな世の中に、していきたいと、思っています。先を観て、世界中の子々孫々のために、頑張りましょう。もう一度、理想を持って、皆で仲良く、和を以て、その世界を、実現していきましよう！・・・『特攻隊員達が、戦後の私達に託された気持ちの実現は、今こそ、このことだ！』と、思えてなりません。

「新型コロナウイルス」等に負けず、頑張りましょう！





特攻平和観音経

恭しく伏して惟んみるに天地開闢以来この世に生を享けしもの幾十百万億兆なるを知らず。その間同種相集い同族相結んで国をなし互いに境を劃し、相互反目反噬してその国土の拡張を図り争奪して止まざること百万方劫なり。

就中、中世以降、西欧の諸列強は善良盲昧の後進諸国を併呑し、もろもろの種族を圧伏して植民の苦を与え、その野望の榮を取りぬ。世界の旧秩序即ち是れなり。

我が邦は、古來平和を以て八紘為宇の大理想となし、万邦融合の大理念を掲ぐることに、ここに三千年、昭和の聖代に至り、世界に一大新秩序を齎らさんことを庶幾し遂に曠古の大戦となる。

一億同心。打ちてしまんの豪氣蕩々、挙国戦務を務むるも、奈何せん、彼我の戦力隔絶し、戦勢日に非に

て、大事將に去らんとす。慈に忠勇無双の紅顔の烈士、自奮自励、九死に一生を

期せず、特攻以て敵機、敵艦船を求めてこれを屠り敵陣營の膽を奪う。その挙の壮烈にして、その果の偉大なる、全世界の矚目するところなりき。然りとはいえども、遂に

惨絶の敗戦に会す。我が邦無前の苦艱、あやんぬる哉。特攻烈士の挺身殉国の表情を付度すれば、人皆言辞を嚙み、熱淚胸宇に充つ。それ人身は享け難く、その生を終るや難し。前漢の大史公司馬遷にこれを聞く一人固より一死あり。

死或は泰山よりも重く、或は鴻毛よりも軽し。これをうるに越くところ異なるなり」と。特攻勇士の諸靈は正に忠烈の龜鑑なり。諸靈が父母の恩愛を断ち、大忠、大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比なる境涯に相到せんか誰か万斛の涙なきを得んや。

老いも若きも泣き  
男も女も哭き  
草も木も、馬も羊も涙せん  
玉も磚も悉く悲しまん  
天地万象凡て働きて止まざらん

唯、諸靈を慰め得るもの一つあり宇内に無慮一百三十有余の独立国家の新秩序の出現これなり。真に世紀の偉業。この赫然たるに匹儔するもの果たして他にあらんや。

これ正に諸靈の志の顕現なり。諸靈の血の発露なり。諸靈や、大仁にして大徳、大勇にして大善なり。故に諸士の靈徳や無量なり。諸士の光顔や巍々たり。諸士の威神や無極なり。

その威徳は日月と耀を争い、その勲績は末代永世に亘りて宇内に広宣流布せられんこと豈疑を容るるの余地あらんや。

嗚呼尊い哉、嗚呼仰がん哉、長存不滅の光  
南無特攻平和観世音菩薩  
南無特攻平和観世音菩薩  
南無特攻平和観世音菩薩  
南無特攻平和観世音菩薩

特攻平和観音経の解説

世田谷山観音寺住職

太田恵淳

天と地に分かれ世界が始まって以来

この世に生まれ出でた生命は数知れない  
その間、同種、同族で結束し国をつくり、  
自らの領土を広げるための奪い合いを繰  
り返してきた

ことに中世以降 西欧列強諸国は純朴な  
後進の国々・種族を力で隷属させ、その  
利益を一方的に搾取し楽を得る。

世界の旧秩序とはそういうものであった  
我が国は日本書紀の時代から

「天の下では民族などに関係なく全ての  
人は平等である」ことを根本理念として  
三千年

昭和となり 世界に新たな秩序（＝世界  
をひとつの家とする）を心から願っ  
ついに未曾有の大戦となる

国民が心をひとつにし戦いに挑むも 戦  
力の差は埋めようもなく日々戦況は悪化  
し 先の見えぬ状態であった

そこに 忠義心と勇気を持つ年若き烈士  
たちが自らを奮い立たせ「九死に一生を  
得る」事を考えることなく 特攻によつ  
て敵機・敵艦船を打ち 敵を驚嘆させた  
のである

その烈しき 勇ましき その大いなる戦  
果は全世界の矚目するところとなつた  
しかし ついに惨絶の敗戦を迎えること  
となる

それはかつてない苦難であつた  
戦争は終わったのである

特攻烈士の国思う誠心を考える時 誰も  
が言葉のみ胸を打たれる

人間として この世に生まれることは難  
しいことである

人間として 死に方もまた 難しいこと  
である

司馬遷いわく  
「人はもとより死すべきものであるが

その生命は山より重いこともあり 羽毛  
より軽いこともある それは生命の果た  
す役割が違うからである（故に尊く生き  
てこそ価値がある）」と

特攻勇士の諸霊は忠義心の鑑である  
諸霊が父母の恩愛を断つて

忠 孝 義 勇に徹した尊き境涯に思い  
至り涙を流さずいられないものはない  
だろう

老人も若者も泣き、男も女も泣き  
草も木も 馬も羊も涙を流し

玉も磚もことごとく悲しみ

この世のすべてが嘆き続けてやむことが  
ない  
しかし諸霊の心を安らげうるものがある  
それは 世界という屋根の下 およそ百  
三十をこえる国々が独立し植民地の苦し  
みから解放されたこと  
つまり新たな秩序の出現そのことである  
まさに世紀の偉業

この輝きに匹敵するものが他に  
あるだろうか  
これこそは諸霊の志の顕現である 諸霊  
の流した血の現れである  
諸霊は 仁・徳・勇・善たる大いなる魂  
であり

その姿はまぶしく  
その徳は限りない  
太陽や月の如く光り輝き

その功績はいつまでも広く世界に知られ  
るのであろうことに疑いの余地はない  
ああ 尊いかな ああ仰がんかな 永遠  
不滅の光

南無特攻平和観世音菩薩

南無特攻平和観世音菩薩

南無特攻平和観世音菩薩

南無特攻平和観世音菩薩

南無特攻平和観世音菩薩

南無特攻平和観世音菩薩

南無特攻平和観世音菩薩

八紘為宇

日本書記「掩八紘而為八紘（あめのした）をおおいて宇（いえ）となす」より。全世界を一つの家とする

打ちして止まん

≪「敵を打ち砕いたあとに戦いをやめよう」の意≫

敵を打ち砕かすにおくものか。

強く勇ましい気性

広く大きい

戦務

戦略・戦術を実施する事務の総称。大日本

帝国海軍の秋山真之が取り入れた概念

瞠目

驚いたり感心したりして、目を見張る様子

やんぬるかな

いまとなつてはどうしようもない おしまいだ

忠列

忠義心が厚いこと

亀鑑

手本 模範 「亀」は昔、その甲を焼いて

吉凶を判断したもの、「鑑」は鏡の意

玉も磚も

宝石もガラクタも

赫然

かがやくさま さかんなさま

光顔や巍々たり

お姿はまぶしく

威神や無極たり

徳は限りなく



藤田理事長による祭文奏上



陸・海軍特攻平和観音像



池前祭



太田恵淳住職による願文奏上

第69回特攻平和観音年次法要に寄せて

世田谷区長 保坂 展人

先の大戦から七十五年を迎え、元号も、昭和、平成から令和と代わり、世田谷観音の第六十九回目の特攻平和観音年次法要を迎えられました。

私も毎年、世田谷観音の特攻平和観音年次法要に出席させていただいていますが、本年は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けてやむをえず、寄稿させていただきます。

この度の新型コロナウイルス感染症は、世界同時に広がった非常事態であり、社会と経済にとっても未曾有の打撃です。私たちは、世界同時に直面する困難を乗りこえ、英智を結集して何としても平穏な生活環境を回復する決意です。これまでに、私たちが、安心して暮らして行くことができたのも、先の大戦で前途洋々とした未来がありながら絶望的な戦況の中で、平和な世を願い、ご家族や友人、親しい方などに想いを寄せ、大空等に散って行かれた特攻隊員の尊い犠牲があったことを忘れてなりません。

我が国は、戦後七十五年に渡り、世界中のどの国とも一度も戦火を交えることなく、平和の歴史を積み重ね今日を迎えています。遠ざかる戦争の記憶の中で、改

めて、平和の尊さを、先人のご努力を、若い世代に伝え、引き継いでいかなければならないと思っております。

戦後七十年目を迎えた平成二十七年に、知覧特攻平和会館に収蔵されている特攻隊員の手紙や遺書が、南九州市教育委員会で文化財に指定されました。この中に、昭和二十年四月に知覧より出撃し戦死された、穴澤利夫さんが、婚約者にあてた最後の手紙を目にいたしました。

「二人で力を合せて努めて来たが 終に実を結ばずに終った 希望を持ち乍らも心の一隅で あんなにも恐れていた、時期を失する、と言ふことが実現して了つたのである 去月十日 楽しみの目を胸に描き乍ら 池袋の駅で別れてあつたのだが 帰隊直後 わが隊を直接取り巻く状況は急転した 発信は当分禁止された」

婚約をしながらも、ゴールに至る前に戦地に赴いたことにふれています。そして、ついにその日がやってきます。「そして今 晴れの出撃の日を迎へたのである 便りを書き度い 書くことは うんとある 然しそのどれもが今までのあなた

の厚情にお礼を言ふ言葉以外の何物でもない」と記されています。出撃を前に、婚約者と家庭を築くことを果たせない切ない心情が強く伝わってきます。

その続きの一節には、「婚約をしてあつた男性として 散っていく男子として 女性であるあなたに少し言つて征き度い

『あなたを幸せを希ふ以外に何物もない 徒に過去の小義に拘る勿れ あなたは過去に生きるのではない』と、そして「あなたは 今後の一時一時の現実の中にいけるのだ 穴澤は現実の世界にはもう存在しない」とつづっています。

夢を果たせなかつた一方で、婚約者の将来の幸せを願いながら、四月十二日に知覧を飛び立ち還ることはありませんでした。特攻隊員としての使命感と心を寄せた。女性への思いがひしひしと伝わってきます。幸せな家庭を築き、夢と希望を抱いていた若者の心情を察すると、悲しみに胸が締め付けられる思いです。

私たちは、戦後七十五年という節目の年を迎え、戦争の記憶を継承していくことが難しくなってきました。改めて、恒久平和を希求し、平和の大切さを後世伝え、歴史の証言を確実に伝承していくため、世田谷公園の中の平和資料館を運営してまいります。

結びに、皆様のご健勝をお祈りし、世田谷区長としての挨拶といたします。

この度、第69回特攻平和観音  
年次法要の開催にあたり、皆様方  
のご尽力に敬意を表します。

国家に殉じた英霊が安らかに眠られ  
ますことを、お祈り申し上げます。

小職も常に戦没者に想いを馳せ、  
日々の公務に当たって参ります。

合掌



“ヒゲの隊長” こと  
参議院議員

佐藤 まさひさ



宇都隆史

自由民主党  
参議院議員(全国比例)  
元自衛官



第六十九回特攻平和観音年次法要の  
御齋行にあたり、英霊の崇高な御遺徳を  
偲び、謹んで哀悼の誠を捧げます。

祖国の平和を守らんがため、若くして  
その御魂を捧げた英霊の無念さは如何ば  
かりかと察するに余り有ります。崇敬と  
感謝の念を深く心に刻み、戦後失われた  
我が国の誇りを取り戻すべく、粉骨碎身  
努めて参りますことを改めてお誓い申し  
上げます。

英霊の安らかならんことと、本日御参集  
の皆様御健勝と御多幸を心より  
祈念致します。

令和二年九月二十二日



義烈空挺隊の出撃に思う

理事 岡部 俊哉

昭和58年、空挺館（習志野駐屯地）において初めて義烈空挺隊を知った。痛ましい特攻のイメージとは対極にある奥山道郎隊長をはじめとする同隊の出撃風景が衝撃的だった。

義烈空挺隊の沖繩特攻は、陸軍の第8次総攻撃及び海軍の菊水7号作戦すなわち陸海航空兵力による総攻撃（航空特攻）の一環の義号作戦として、「沖繩北・中

（読谷・嘉手納）飛行場に強行着陸して、所在する敵機、集積軍需品、施設等を爆破するとともに、可能な限り同地附近に所在して敵の飛行場使用を妨害する」ことを目標に計画された。当初予定されていた昭和20年5月23日は天候不良により直前で延期され、翌24日決行となり、同夕諏訪部大尉率いる第3独立飛行隊の97式重爆12機に分乗した奥山隊は健軍飛行場を発進した。

その時の映像や大量の写真そして遺書・遺品が多数現存している。それらからは義烈空挺隊将兵の透徹した使命感、厳しい訓練で鍛えられた体力・気力、これらに裏付けされた満ち溢れる自信を垣間見ることがができる。そして特筆すべきは、

当時の国家・国民の風潮、特攻に対する期待・認識等を踏まえても、強がって見せるとか意地を張るとかの建前を完全に超越した自然体の心境・死生観が見える。機上から微笑みながら手を振る奥山道郎・諏訪部忠一両隊長をはじめ、肩の力が抜けた笑顔の各将兵に、これから死地に赴く悲壮感は全く感じられない。如何にしてこの境地に至ったのか、この笑顔の陰に何があったのだろうか。故田中賢一氏（本会元評議員）の著書等を参考に考察する。

まず背景として、奥山隊長の原隊である第1挺進団挺進第1聯隊はパレンバン空挺作戦遂行のため、海路で南方集結地に向け前進中、昭和17年1月輸送船の船火事による海没に見舞われ、急きよ編成完結を繰り上げた弟分たる第2聯隊に「空の神兵」の栄光を奪われてしまう。次いでビルマ攻略作戦において、敵殲滅を図る地上部隊と連携した、第1聯隊主力による敵の退路遮断に任ずるラシオ空挺作戦を昭和17年4月29日に発動したが、目標のラシオ直前に迫りながらも進路を厚い雲に遮られ中止となり引き返す。当時の奥山中尉を含め第1聯隊将兵は、その武運に見放された仕儀に如何ほど落胆し憤慨されたのであろうか。

内地に帰還した後、7月には宇都宮飛行場において天覧降下を第1聯隊が担当することになり、その士気を高揚し、溜飲が下がる一助となった。

第1聯隊第4中隊長となった奥山大尉に対し、昭和19年11月末に第1聯隊から人選して教導航空軍（後の第6航空軍）直轄の特攻部隊を編成すべく命令が下された。サイパン島アスリート飛行場に強行着陸し、B-29を破壊することが任務の部隊である。豊岡（入間）次いで発進基地浜松に移動した奥山隊（中野学校出身者10名を含む136名）は協同する第3独立飛行隊（隊長…諏訪部大尉）とともに義烈空挺隊と呼称されるようになり、当初予定された12月24日決行に向け猛訓練に励んだ。飛行隊の練度の問題で延期となったものの、機をみての決行ということで、昭和20年1月17日～22日出撃態勢で待機するが、サイパンまでの飛行に必要な燃料給油の中継基地である硫黄島は米軍の連日の爆撃等で使用できず、また敵の硫黄島上陸の公算が高いことから、更に延期そして中止が決定される。義烈空挺隊は第6航空軍直轄の特攻隊として編成を解かれることなく、奥山隊は唐瀬原（宮崎県児湯郡川南）に帰ることとなる。この間、高千穂部隊（第2挺進

団第3聯隊・第4聯隊)によるレイテ空挺作戦が昭和19年12月6日に実施された。唐瀬原に戻った奥山隊は、義烈空挺隊の編成に伴い第4中隊が新たに編成された原隊には兵舎の余裕がないことから、思ひもかけずレイテから帰らぬ第3聯隊の空き兵舎を使用することとなる。

2月19日の米軍の硫黄島上陸に伴い、義烈空挺隊は強行着陸による硫黄島飛行場攻撃を命ぜられ、西筑波飛行場に集結する。3月20日頃の決行を目前に勇躍準備していたところ、硫黄島陥落に伴い、たもや中止となり、失意の底に沈みつつ唐瀬原に帰るのであった。

そして4月1日に米軍が上陸を開始した沖縄において、冒頭に紹介した義号作戦すなわち義烈空挺隊による空挺特攻が決行された。作戦発動に当たり計画した海軍機の護衛が得られず、結果的に陸軍単独の作戦となってしまった。出撃した12機の内4機が故障等で引き返したものの、北(読谷)飛行場に飛来した5機の中の1機が同飛行場に胴体着陸し、跳び出た空挺隊員が航空機、燃料等を破壊・炎上させ、米軍を混乱に陥らせるともに、翌朝まで滑走路の使用を不可能な状態にしたと言われている。陸海航空兵力による総攻撃については、翌25日は天候

不良により十分な成果を収めることはできなかつた。話を攻撃時の笑顔とその境地の考察に戻す。

そもそも空挺作戦とは、作戦地域における私の航空優勢下、輸送機・滑空機で空中機動して落下傘降下あるいは着陸により奇襲的に降着したる後、地上作戦と連携した戦闘を実施して、最終的には地上部隊と提携・交代することにより任務を達成するものである。よって単純な言い方をすれば、空挺作戦は航空機を輸送手段とする陸上作戦である。しかしながら航空機及び落下傘を手段とするその一連の行動において、当時の技術的なレベルからすれば実戦のみならず訓練でも一般の部隊と比較して危険性は遙かに高い。そういった観点からは、常に死と隣り合わせといった過言ではない落下傘部隊に志願した者としては、平素からの覚悟・心構えが確立されていたものと思う。因みに義烈空挺隊が実施した空挺特攻は、敵の航空優勢下、足が遅い重爆をもって敵の対空砲火を掻い潜って敵勢力下の飛行場に強行進出したる後、搭乗隊員があなたも意志を持ったクラスター爆弾の如く跳び出し、玉砕するまで敵航空機、施設等の破壊を継続するもので、操縦者・

航空機が爆弾と一体となって敵艦船に体当たりする航空特攻とはその目標・要領が異なり、当然本来の空挺作戦とは本質的に別物である。

奥山隊は、パレンバン空挺作戦で御株を奪われ、かつラシオ空挺作戦での降下直前で中止の辛酸を嘗めた第1聯隊から選抜された者達であり、その経験者である。更にこれまでの間、レイテ作戦に第3聯隊・第4聯隊が出撃した。言うなれば薄命の第1聯隊の代表として晴れの武勲を立てるといふ思いもあつたのではないだろうか。

本来であれば特定任務の臨時部隊の編成は、作戦目的・目標が達成あるいは消滅したならば解組し、原隊復帰させるものである。義烈空挺隊はサイパン攻撃任務を中止せられた後も、特攻任務継続のため、具体的な運用構想がないまま直轄の特攻部隊として残され、硫黄島攻撃中止後も同様に待機させられた。一度特攻隊に指定されれば、この呪縛から逃れるには死ぬしかない。この残酷な現実には、上級部隊たる第6航空軍は、「既に半年間、計画しては取り止めに成ること再三に及ぶは、その心情忍び難い」(「大空の華 空挺部隊全史」ということで、誤解を恐れずに言えば半ば特攻攻撃を目

的とする義号作戦を大本营に上申することになる。歴史として捉えれば、結果的に半年間における2回の中止と度重なる延期の末の出撃であるが、当時いつまで待機させられるか全く分からない義烈空挺隊にとつては、満願の日が分からない難行苦行の様なものであり、義号作戦発動によつてその苦悩の日々から解放されるという意義があつたものと思う。

一方で義烈空挺隊将兵は、結果として半年もの長時日に及んだ終わりが見えない苦行の日々、そして見えた時が自己の終焉の時という現実を如何に克服したのか。いくら選抜された義烈空挺隊員としての矜持を持ち、使命感を確立しようが、何度も遺書を書く様な異常な状況に伴う精神的重圧は計り知れないものがある。加えて特攻隊として優遇されている身を自虐的に「愚劣食放題」と自称したときされるが、サイパン特攻に当たり兵は全員伍長に昇任し、下士官の中にも特別昇任した者もあり、出戻りでしかも特攻隊の看板を背負つたまま生きながらえての唐瀬原待機そして原隊の目に晒されることは屈辱そのものであつたらうし、その苦痛たるや如何ばかりであつたらうか。これらを乗り越えられたのは、最後は個

人で敵艦に体当たりする航空特攻とは異なり、義烈空挺隊は部隊であり、最後まで隊長と、戦友と共に行動するからという見方もある。しかしながら、大半が20代の血気盛んな青年の集団をして自暴自棄に陥らせることなく、一枚岩の強固な

団結・規律・士気を堅持し、各人の健康管理を万全（猛訓練には付きものの怪我や病を克服）に維持し、もつて不意の出撃に対して部隊・隊員の即応・即動態勢、精強性、健全性を保持し続けることは決して容易なことではない。その中で特攻隊編成時136名の奥山隊は一名の脱落者を出すことなく全員で（第3独立飛行隊は技量上の問題もあり途中で一部入れ替え）、沖繩に向け出撃したものであり、これは奇跡に近い。これを可能にしたのは、奥山隊長の厳にして慈、緩急自在の類い希なる統率に尽きる。彼は豪傑が多い落下傘部隊においてもその最右翼に位置し、正義感強く、体力気力抜群、酒量もまた群を抜き、人情に脆く感懐家で、部下の信望は極めて厚い人物（「陸軍落下傘部隊戦記 あゝ純白の花負いて」）であつたという。義烈空挺隊の将兵が出撃時に見せた笑顔や態度は、明朗闊達な隊風そのものの現れであり、奥山隊長の

人品とその卓越した統率の証でもあつたのだ。旧軍落下傘部隊の後を継ぐ陸上自衛隊第1空挺団にとつて、享年26歳で散華された奥山隊長にこそ、空挺隊員・幹部特に初級幹部として追及すべき姿・統率があるものと確信している。

此の度、「特別攻撃隊全史」改定に携わることになつた機会に、これまで気になりつつも、思いのみが先走り、上面しか捉えていなかった義烈空挺隊の出撃隊容について、考察を試みることにした。第1空挺団7年間を含む陸上自衛官勤務を三十数年経験しながらも、既に奥山隊長の2倍を優に超える馬齢を重ねた身、正直言つて納得いく結論ではない。何か心が収まらない。結局、この問題は「特攻とは何か」を探求するものである。空挺団勤務時、特に空挺団長として直接御指導をいただいた故田中賢一氏に、御生前もつとお話を伺つておれば、教えを請うておればと悔やみつつ、拙文を寄稿させていただいた。

最後に義烈空挺隊の将兵は元より、故田中賢一氏の御冥福を心からお祈り申し上げる。

第一六戦隊及び基地第一六大隊戦闘経過  
 会 員 中溝 二郎

海上挺進第一六戦隊は、陸士五四期の

月井禎吉大尉を戦隊長とし、通称暁第一九七五五部隊と称し、第一中隊長は山本清中尉、第二中隊長は児島浩中尉（いずれも陸士五六期）第三中隊長は門田隼少尉（陸士五七期）、本部付として馬場照正見習士官（幹候一〇期 二〇年一月少尉）、群長は豊浜の船舶幹候隊出身一期の見習士官、隊員は特幹一期生（十九年十一月伍長）であった。

戦隊は九月初めから、幸ノ浦基地で訓練を行なっていたが、正式には十月五日宇品で編成された。

十月十四日、宇品を出港し、翌十五日に門司港に入り、二十五日、第一中隊長は平安丸、本部及び第二中隊長は加古川丸、第三中隊長は大徳丸に分乗して同港を出港、十一月一日台湾の基隆に寄港、更に三日に高雄港沖に着き、十一月五日に高雄港から船団編成して出航した。

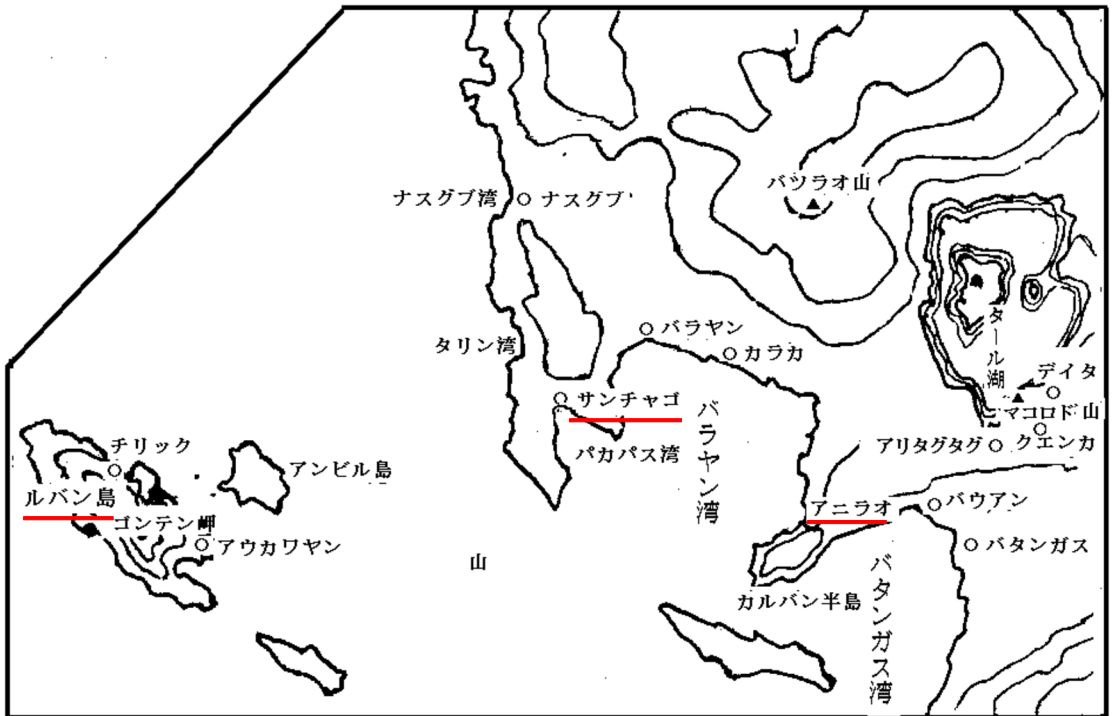
船団は海上を無事航海し、九日に比島ルソン島西海岸のスーピック湾に一時入ったが、直ちに中航して十一月十一日にマニラに入港、十四日に第二、第三中隊長は、

舟艇を動かしてバターン半島マリベレスに到着し、二十七日、コレヒドールに寄港した後再度マニラに上陸した。

第一中隊長は、舟艇をマニラよりマリベレスに回航中バターン半島カブカーペン東方海上において米軍機の空襲を受け、戦死者四名、負傷者二名（後日内地送還一名、台湾に送還後他戦隊に転属一名）と舟艇に損害を出し、残員はマリベレス泊地で本隊と合流マニラに戻った。

十一月二十九日、陸路經由で南下し、バタンガス州マビニー郡アニラオ（カルパン半島のバラヤン湾に面する地区）に展開し、防諜上漁撈第一六大隊と呼ばれた。

本隊は二十年一月三十一日まで、アニラオに駐屯したが、この間に一月二十六、二十七日の両日、米軍の魚雷艇による砲撃やP38の空襲、銃撃を受け、多数の舟艇に被害を蒙った。



一月三十一日、サンチャゴにあった第一五戦隊は、堤中佐の命令により、ナスグブ沖に出撃を行なったので、これを補充し引続き舟艇による船団攻撃を行なう目的で、同日夜、戦隊員及び舟艇の一部を残し、ほとんどの舟艇である六〇隻を舟艇航行で、第一五戦隊の基地であったサンチャゴに前進し、二月一日朝に同基地に到着した。

以後一五戦隊は度々ナスグブ沖に出撃を行なったが、多くは米船団が陸地近くになかったことにより、効果を挙げ得なかった。堤中佐（第二海上挺進基地隊長）は二月十五日に至り、戦法を変え、海峡を通過するもの及びナスグブの沖合に出没する米船団を背部から奇襲する目的で、更に一六戦隊の一部を残して、戦隊の主力すなわち、戦隊長月井大尉以下、山本、児島、門田の各中隊長、丹羽、伊達、大沼の見習士官、戦隊付きの三井田軍曹及び隊員三十三名、計四十四名（四十一名との説もある）を戦隊長の指揮の下に、可動舟艇二十二隻で同基地を前進し、ルバン島に移動させることとした。

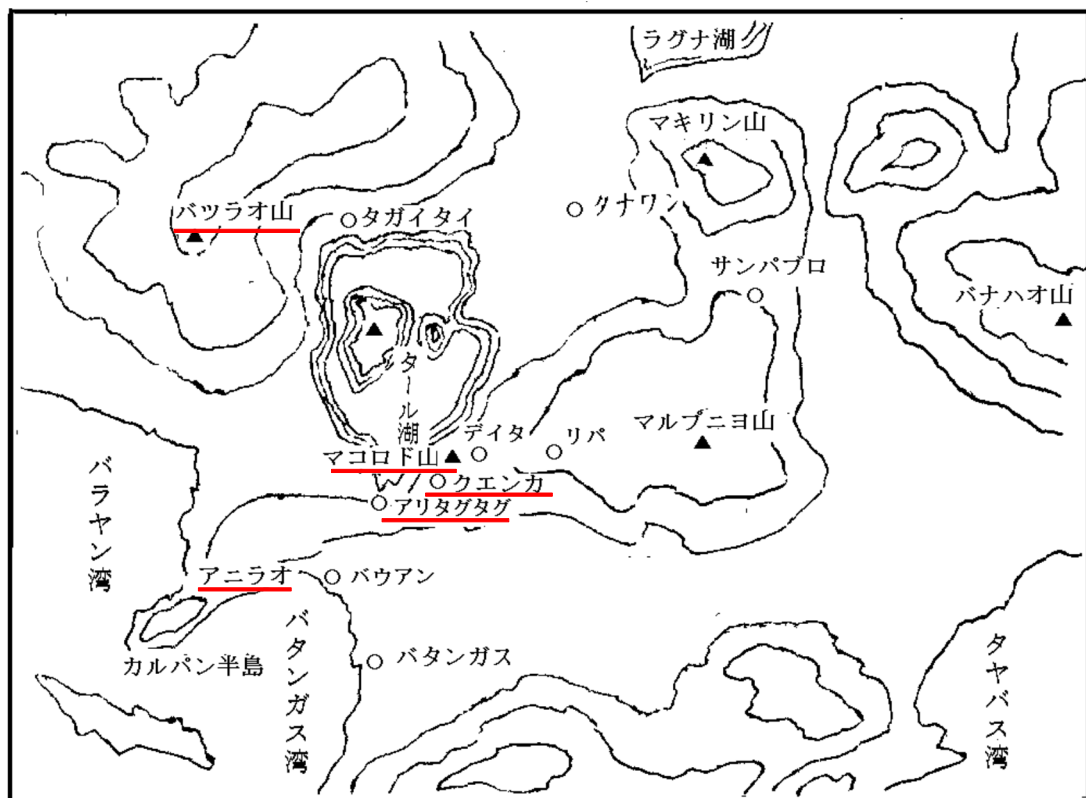
戦隊主力は、約一〇〇キロの航行を行なうルバン島に着いたが、この移動で故障のため漂流中にリーフ（珊瑚礁）に

座礁したので舟艇を焼却、サンチャゴに引き返した乗員二名と、航行中舟艇一隻が行方不明となる事故があった。

二月十七日ルバン島のチリックに上陸し、同島に所在していた藤兵団（一七連隊）下の小野田小隊と、既に到着していた、一月三十一日ナ

スグブに出撃後同島に渡った一五戦隊の上野中尉らと合流し、舟艇出撃の機会を待っていたが、二月二十八日に米軍の歩兵及び戦車部隊がチリックに上陸を開始したため、戦闘の後、海岸から撤退し、戦隊長以下五〇六高地に入り（この際舟艇数隻が捕獲された）、

三月四日から二十三



日までの間に時々チリックに潜行し、米軍陣地への斬込みを行なっていた。

以後は五月八日に、ゴンテン付近の山中でゲリラ隊と遭遇して戦鬪となり、ほとんど戦死したが、これまでの間に食糧の欠乏とマラリアのために斃れた者が多かった。

同島で生還したのは三名で、翌二十一年に至つて山中で初めて敗戦を知つた。

一方サンチャゴに残留した隊員は、舟艇を破壊して第一五戦隊の残員とともに、基地第一五大隊長中島大尉の指揮の下、藤兵団（歩兵一七連隊）の市村大隊の指揮下に入り、クエンカ方面の守備に回つた。

ナスグブに上陸した米軍は、バラヤン湾を経由してバタンガスに達し、北上してリパに達する路線を確保する目的で、アリタグタグ、クエンカを目指して進行してきた。

戦隊の大部分は三月一日より第一五戦隊第二中隊長の鈴木中尉に率いられ、また、一部は戦隊本部付の馬場少尉が指揮してアリタグタグの守備につき、三月四日から戦鬪に入り、三月五日以降ここの戦鬪で十名が戦死した。その後、クエンカに撤退してからも戦鬪は続き、三月

十二日から十六日までの間にここでの戦鬪で戦死者十二名を出した。

以後市村大隊の本部と共にマコロド山に転進し、ここで第六戦隊群長の西野少尉の指揮の下に、斬込等の戦鬪を続けながら自活していたが、この地域全体の戦鬪で合計三十五名が戦死した。これらの残員（六名）は、二十年九月ここで終戦を迎えた。

また一部は四月二十日以降、基地第一五大隊の者とともにバツラオ山に移動し、同山地で数名が生存した。

こうした分散戦鬪のため、戦隊の被害は將校十三名、隊員七十三名、戦隊付下士官二名の合計八十八名が戦死し、ほかに転属者二名があつた。

海上挺進基地第一六大隊は、暁第三三三〇部隊と称し、大隊長佐沢少佐（三期の特別現役志願將校）の下に、中隊長には笠間一枝中尉、藤井武嗣中尉、小隊長として伊藤弥平次少尉等で、昭和十九年九月十六日に福島県の会津若松歩兵二四連隊・歩兵二九連隊補充隊で編成を行なつた。

十月七日に、本部及び第一、第二、第三中隊が、翌八日に整備中隊が続いて宇

品を出発し、二十八日にルソン島北サンフェルナンドに上陸し、十二月中旬に南部ルソンのバタンガス州のバラヤン湾に面するアニラオに展開し、基地の設営を行なっていた。

なお大隊は、現地では基地第一六大隊と呼ばれていた。

戦隊は前記のように、二十年一月三十一日に一五戦隊の基地サンチャゴに前進し、その後主力はルバン島に転進した。

大隊のうちの二コ中隊は、ナスグブに上陸し東進してきた米軍と、カニンパ付近で二月四日頃戦鬪を行ない損害を出した。

大隊の主力は、堤中佐の命令によりアニラオから東進して、サンパブロ付近に転じ、藤兵団長命により同地区の警備に当たり、ゲリラ討伐を行なっていたが、二月下旬頃ナスグブ方面から移動してきた第一九大隊（滝沢大隊）と警備を交替した。

なお主力は三月に入つて、サンパブロから北上し、マキリン山に移り、四月二十二日に同地から撤退してバナハオ山に転じ、自活中に敗戦を迎えたもので、比較的戦鬪には当たらなかつた。

同大隊は総員八七三名中、五六五名が

戦死し、三〇八名が残った。なお佐沢大隊長は降伏後自殺したといわれているが、この隊はルソンでは生残者の多い隊であった。

「ルバン島の戦い」  
第二戦隊員 儀同 保

海上挺進戦隊が何故「ルバン島」にわたって戦闘したのか？何故初期の目的通りに行かなかったか？

本稿はもと第二戦隊、儀同 保氏がルバン島の生還者からの聞き取りをまとめ、十五、十六戦隊に関係する部分だけ一期生会報に掲載されたものである。今回その内容を分かりやすくするため、一部を修正して掲載する。

十六戦隊ルバン島へ

昭和二十年一月三十一日に、南部ルソンのナスグブにアメリカ軍が上陸を開始した。日本側もここが敵の上陸地点と予測して、十五戦隊を出撃させる作戦だった。直ちにその夜すぐ南のタリン湾に分駐していた上野中尉が、二十人の部下と共に出撃した。

次いで戦隊長小串大尉の指揮で、舟艇三十隻が二月十日サンチャゴからナスグブ沖に出撃し、戦隊長が仮棧橋付辺で小

型高速艦に体当たりして戦死した。これ以後も数回出撃したので、十五戦隊は舟艇人員とも残り少なくなつた。

このためバラヤン湾の東側にあるカルパン半島のアニラオに基地を置いた十六戦隊を、このサンチャゴに移した方が適切だと判断され、移動命令が出て二月一日の夜移動したのであった。

◇ 戦隊はカラタガン半島の先端に近い入り江に舟艇を入れ、シュガー・セントラルに本部を置いた。

二月十五日、第二海上挺進基地本部長の堤中佐から“第十六戦隊は可動舟艇を以て海峡を通過する敵輸送船団を攻撃せよ。もし洋上において船団に遭遇せざるときは、全艇をルバン島に移し、同島において攻撃の機をまて”という命令が来た。

これを受けた月井戦隊長は、各中隊長に舟艇を点検させ、航行可能な艇を選ばせたが、二十二隻だけであった。

乗員は、戦隊長と三人の中隊長（山本、児島各中尉、門田少尉）及び群長のうち丹羽、伊達、大沼の三人の見習士官と、戦隊付の三井田軍曹、これに隊員三十六名と決めた。

艇に乗れなかつた残員は、基地第十五大隊の中島大尉の指揮下に入り、陸上戦闘に加わる事になった。

◇ 翌十六日、日没とともに戦隊長艇を先頭に基地を出発した。サンチャゴ岬を回り南支那海に入ると波が荒くなり、操縦は困難になった。

一隻は岬の先端付近で航行不能になり、漂流するうちにリーフ（珊瑚礁）に打ち上げられたので、艇を破壊沈没させ乗員二人はセントラルに引き返した。

又、この海域で、一人の乗った一隻が隊列から離れたので、近くに居る者が名を呼んだが聞こえなかつたのか闇にまぎれてしまった。

五時間余りかかって、戦隊長らは目的地ルバン島の中ほどにあるチリックの港に着いたが、他の者は方向を誤って他の海岸でリーフで舟底を割ったり、寄せ波で横転したのもあったりで、チリックに着いたのは半分ほどであった。

夜が明け島のあちこちに漂着した者が集まり、人員の被害は行方不明の一名のみと判った。

◇ 町には比島から派遣されている警備隊の一部がいて、安全と分かり、艇はチリック

ク港の東に流れ出る河口に係留したが、使用可能なのは十隻であった。

チリックには、十五戦隊の上野中尉

(第二中隊長) が部下三名と先に来ていた。この一行は、一月三十一日ナスグブ沖に出撃したが、二隻は魚雷艇に追われて西に走って、ルバン島の東のアンピル島に着き、次いでチリックに移っていたのである。

十五戦隊の関根伍長がこの島に渡ったのはその後で、上野中尉はこの場所が船団攻撃には好条件と考え、情報隊の無電でサンチャゴに残っている可動舟艇をチリックに移動させるよう連絡した。

それで前田見習士官と隊員の関根、星加、永谷の三人が、二月の二十日の夜舟艇二隻でサンチャゴからルバン島に着いた。

部下七名となった上野中尉は、幹線道路に面した民家を宿舍とし、舟艇はチリックの入り江の西側に置いた。同じ入り江の東側には十六戦隊に係留してあった。一方十六戦隊も同様に町の民家に数人ずつ分散して入っていた。

藤田政彦伍長(十六戦隊)の記憶では、この頃からアメリカ機が時々飛来し“近く戦闘になる、君達は無駄な戦争をせず

投降せよ”というビラを撒き、中隊長から回収命令が出される、ということがあった。

### アメリカ軍上陸

二月二十八日の朝、アメリカ船団の接近を見た。

“敵船団現わる”との報告を受け、戦隊長はすぐ入り江の舟艇破壊を命じ、隊員は砲声の中を港口の①係留場所に向かった。係留地に着いてみると、ちょうど引き潮で艇は砂地に傾いており、敵側からの砲弾が落下してきて、艇を壊す余裕はなく無念にもそのまま引き返した。(何故前夜(少数でも)出撃出来なかったのか?)



艦砲射撃は夜明けと共に始まり、はじめはチリックの入り江のあたりが主であったが、やがて裏の高地にも達した。上陸がはじまったのは午前九時三十分で、チリックとその西のビゴ―海岸から水陸両用戦車が上がってきた。

港の栈橋からアメリカ兵が上陸して来るのを見て、戦隊長はかねて他隊と打ち合せてあったとおり、チリックの南方五百高地で合流し、そこで敵と交戦という

ことで高地への山道に入った。

数人がマラリヤで苦しんでいたが、最も重症だった上田伍長は、ついて行けないと諦め、この山道で拳銃自殺をした。



住民もあまり通らないほどの道なので、目標の高地に達するのに一日近くもかかった。ここでは頂上から少し下の情報隊の横穴陣地を中心に、情報隊、警備隊をはじめ各隊が、あちこちの台地に守備についており、上野中尉らも配置についた。

将校の先任者は警備隊の早川少尉だったが、月井大尉が来て最上級者として総指揮者の立場になった。着くとすぐ戦隊長は、山本中尉(第一中隊長)と児島中尉(第二中隊長)に部下を連れ高地の先にある第一線陣地に加わるよう命令した。

隊員は拳銃とサーベルだけの武装であったが、配備に着かざるを得なかった。



翌三月一日、八時過ぎから第一線陣地とその背後の五百高地に向け迫撃砲弾が集中し、これで高地周辺にいた情報隊の田中少尉、立亀少尉及び多数の隊員が戦死した。

二日も同様で、海軍の整備隊長大崎少尉が直撃弾で戦死、十六戦隊では伊達見



習士官が右肩に、石川新之助伍長が迫撃砲の破片で右腕を皮一枚だけでついでいるほどの傷を負った。

この状況で高地で密集しての戦闘は困難と思われ、戦隊長の判断で各隊は分散して戦うことになった。

戦隊の隊員はアメリカ兵の宿营地への斬込みをすることになった。戦隊長は高地では戦力にならなかつたので、これくらいはせねばならぬと考えたのだろう。

戦隊長自ら先頭に立ち、西垣隆男、坪田晋作伍長を連れ、チリックの町にむかしたが、アメリカ兵から先に射たれそれ以上接近できず引き返した。帰路坪田伍長が見えなくなり、予じめ指定しておいた集結地で夜明けまで待ったが、遂に戻らなかつた。

門田少尉(第三中隊長)と土坂伍長は、火薬を入れた木箱を持ちビゴアの宿营地に、十五戦隊の前田見習士官と星加延明伍長が、その近くのマリীগに向かったが、この斬込みで星加伍長は帰ってきたが、八日の夜明けまで待っても前田見習士官は来なかつた。

こうして斬込みの間に、高地で腕を負傷した石川伍長は、傷にうじがわきはじめ、もう駄目だと判断して十日に拳銃自

殺をした。

### 部隊解散 その後

毎夜日本兵による斬込みが行われたので、アメリカ軍は山地まで入って掃討をはじめた。

このため上野中尉、門田少尉らは隊員を連れ、アウカーヤン二四八高地と呼ばれている山地に移動した。このとき十六戦隊の藤田、馬込の二人がマラリヤで他の肩につかまって歩いていたが、負担に

なるので放置されることになった。上野中尉は、これからも斬込みを続けると言い、他の隊の兵隊と手持ち食料と爆薬などを交換したのを持っていた。

土坂伍長は仲間の二人が将校の指示で放置されたことで、将校に対する信頼感を失っていた。彼はミンドロ島に渡って、

その日本兵と戦闘協力したい、という意見を述べた。それが可能かどうかはともかく、上野中尉と門田少尉はこれに賛成せず「俺達はこの島で戦う。戦隊長からは隊は解散という命令も出ているのだから、好きなようにしろ」と言った。

土坂君に同調したのは上野中尉の部下の山崎、永谷、関根の三人で、ここで他の者と分かれることになった。

◇

このあと上野中尉は戦隊の部下を連れ別行動をとった。三月の中旬にこのルバン島で戦死、という記録になつてはいるが、その最後の場所や状況は明らかではない。

門田少尉も残りの者を連れて南へ向かった。記録の上では三月六日(この日付が誤っているのは明らかで、早くとも三月十日以後だろう)にチリック南方の山中でゲリラ隊と遭遇し、門田少尉、丹羽見習士官と三人の隊員が戦死、となつて

最後の状況まで見届た者はいない。途中置き去りにされた二人は、馬込伍長は水を飲むとうと谷に向かつて行った。分かつているのはここまでで、ゲリラに見つかり射殺されたといわれている。藤田伍長は山中で情報隊の兵隊に出会い、

二人で行動していて終戦を知り、九月十八日にチリックに下りて行き、ミンドロ島のサンホセを経てレイテ島のタクロバン収容所に送られて生還した。

◇

ゴンチン山系のジャングルに退避した月井戦隊長、山本、児島の両中尉ら十数人は、尾根を越えて谷を下り、三月十七日に南側の海岸に出た。そこはゴンチン

浜というところで、六軒の住民の小屋があつたので“六軒バハイ”と呼んだが、みな空き家になつていた。

三日ほど後、戦隊長はミンドロ島に渡る計画で、まず南にあるゴロ島へ渡れるかを調べるため、児島中尉と隊員二人を連れて出かけた。

同じころ別行動をとつていた土坂、関根ら四人は、やはり山越えをしようとしていたが、二人マラリヤの病人がいるので山中の歩行に苦勞していた。

ようやく稜線を越えた翌日、下の谷間の方で自動小銃を連射する音が響いた。不安ではあつたが、ともかく何か確認して来ようと、二人は溪流に沿つて下つた。海岸近くなると椰子林があり、浜には十人以上があちこちに倒れており、右腕が負傷したままの西垣伍長が、ぼう然と立っていた。

◇ 西垣伍長のここで遭遇したのは、次のとおりである。

自分は熱があるので戦隊長にはついて行かず、小屋には他にも何人かマラリヤで寝ていた。服部伍長が小銃を持ち、浜辺の岩の上に見張りに出ていた。

そこへ二隻の①舟艇が浜をめざして来たので、みな友軍が救援に来てくれたと、

何も持たずに出て行つた。しかし乗つていたのはアメリカ兵で、浜に着くと十人くらいが小銃で一斉に射つてきた。

みな小銃や拳銃は小屋に置いてあつたので、椰子の幹にかくれるだけだった。山本中尉だけは拳銃を持っていて、顔を射たれ血が吹き出し、目を手拭いで押しながら射ち続け、アメリカ兵一人を倒した。そして更に胸と腹を射たれ“天皇陛下万歳”と叫びながら倒れた。

隣りにいた高尾伍長が頭を、椰子の根方にうづくまつていた福崎、伊藤、荒木、桜井も射たれ、一緒にいた情報隊の城間中尉と清水少尉も即死した。

全員を倒すと、アメリカ兵はバハイ(家)に火をつけ引き揚げて行き、自分はどうやく右手負傷しているのに気付いた。

伊達見習士官(十六戦隊)がすぐ横に倒れ、腹から血がにじみ出ており、戦隊付下士官の三井田軍曹は脚をやられていた。

土坂、関根君らが浜に来たのは、その直後だったことになるが、伊達見習士官は間もなく息をひきとつた。

◇ アメリカ兵の襲撃があつた翌日、ゲリラ隊がこの浜に来て、埋めた遺体を掘り

返し、衣服もはぎ取つて行つた。

戦隊長らは隣の浜にいたので無事だったが、数日して辻田伍長が病死し、戦隊長もマラリヤがひどくなつた。

児島中尉はこの浜に大勢でいるよりは、少人数の方が安全だろう、自分達はピナカス海岸の方に行く、と脚を負傷した三井田軍曹ら数人を連れ分かれて行つた。あとは戦隊長と西垣伍長らの怪我人病人の三人が残つた。

◇ この頃関根伍長もマラリヤにかかつていた。土坂伍長だけが健在で食料探しに当たつており、久ぶりにゴンチン浜に下りて行くと、浜に西垣伍長と海軍の兵隊二人がいた。

「戦隊長はどうなつたのか」と聞くと、海軍の一人が「隣の浜で月井大尉の死体を見て来た」と見覚えのある軍刀をみせた。

西垣伍長が彼らから聞いたことでは、月井戦隊長は山本中尉を失つてから気力が減退してマラリヤの症状も悪化し、西隣の浜で四月五日に死んだ。最後まで尾形伍長と板東伍長の二人がついており、遺体は海岸の椰子林の中に埋めたが、隊長のあとを追うように坂東が病死し、尾形は一人になつたのを絶望して自殺した、

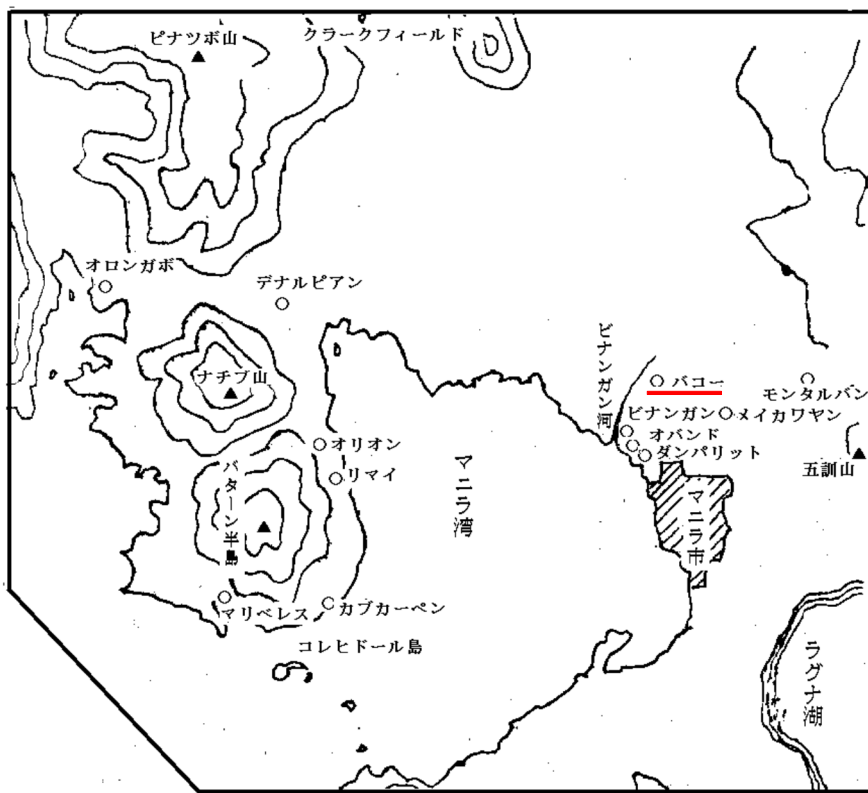
というのであった。

◇

児島中尉らについては、五月八日の朝土坂伍長は、児島中尉らのいる小屋の方

の隊の兵隊に出会い、「今行くと危ないぞ」と止められた。

翌日行ってみると小屋は全部焼かれ人影はなく、死体も見当らなかつた。全員このときやられたらしく、以後このグループの者とは合うことはなかつた。



こうして、戦隊では土坂（十六戦隊）、西垣（同）、関根（十五戦隊）の三人だけとなり、食料探しに山を歩き回っていると他の隊の者に出会った。その折、海軍で十数人、陸軍も二十人くらいが、何人かずつグループを作つて、ほとんどが近くの谷間にいると知らされ、やはり生存者がいたのだ、と心強く思つた。

(以下省略)

これ以後、日本軍が救出に来るのを待つ山中の生活が続いた。ル

ソン島の收容所から日本兵の将校らによる搜索隊が来たのは、翌二十一年三月末のこと、生存者は殆ど下山したが、小野田少尉ら四人が残つたのであつた。

その後、小野田少尉は単独となつて（一名投降、二名戦死）も残置諜者として任務を遂行していたが、昭和四十九年三月遂に投降、帰国した事は有名である。

**第一七戦隊及び基地第一七大隊戦闘経過**  
**会 員 中溝 二郎**

海上挺進第一七戦隊は、略称号は暁第一九七五六部隊と称し、戦隊長は陸士五二期の富田博大尉（十二月に少佐に進級した）で、第一中隊長は山之内実中尉、第二中隊長は石井不二郎中尉（いずれも陸士五六期）、第三中隊長は石橋幸夫少尉（陸士五七期）、副官は江口鉄雄見習士官（幹候一〇期、二十年一月少尉）がおり群長は豊浜の船舶幹候隊出身幹候一期の見習士官、隊員は全部特幹一期生（十九年十一月伍長）で編成された。

隊は昭和十九年十月十五日、宇品で正式に戦隊編成を行ない、十一月三日に、日洋丸・平安丸（第一中隊第一群）に分離し、門司港を出航した。先発船団になつた平安丸は、十一月十三日にルソン島バ

ターン半島カブカーペン沖で、米軍機空襲を受けて沈没し、杉田見習士官以下十名が戦死した。

他の主力の乗船した後発船団は、十一月二十五日に台湾高雄港に寄港した後、無事十二月一日にマニラに到着した。

この戦隊の当初の目的地は、バタンガス州バラヤンと予定されてあったが、現地方面軍の作戦計画により、任務地が変更され、ルソン上陸後十二月五日までマニラ市バサイに駐屯した後、マニラ市の北方二〇キロにあるパコー付近に駐屯することになり、同月十六日に本部及び第一、二中隊はパコーに、同じく第三中隊はダンバリットに移転を完了した。

なおここでは、辛うじて海没を免れた第一八戦隊の一部（大部分は済州島沖とバシー海峡で海没した）、柴沼・栗山各見習士官らの二個群が、戦隊長の若林大尉以下八名でこの一七戦隊に加わった。また北サンフェルナンドからバタンガス地区にある本隊に合流のため南下したが、情勢が悪くなったため、南下せずこの戦隊に合流した第六戦隊の第三中隊が、森少尉以下三十五名がこの地区にいた。

移転以後、パコー、ダンパリット及びビ

ナンガンに駐屯していたが、昭和二十年一月九日にリングエンに上陸して、マニラ街道を南下する戦車兵団を主力とする米軍に対し、同月二十四日から戦闘に入り、二月十日にはオバンド及びパコー付近で基地大隊を主軸として激戦が展開された。この地区の戦闘で①舟艇を持たない、第六、第十八の戦隊員は斬込等の陸戦に参加し、第六戦隊員が二十八名、第一八戦隊員六名が戦死した。

第一七戦隊長富田博少佐は、同戦隊の副官江口少尉と鶴田徹見習士官（幹候一期）以下の戦隊本部直轄群及び石橋幸夫少尉（陸士五七期）以下の第三中隊員を舟艇と共に若林戦隊長の指揮下に入れた。

こうして米軍の本格的な進攻が迫ったので、舟艇の保存を図り、後日の出撃攻撃に備えるため、逐次舟艇航行でマニラ湾を横断し、バターン半島に移動することとなり、二月十一日にビナンガン河口から舟艇を使い第一、第二中隊の隊員はマニラ湾を横断し、バターン半島リマイに向った。

若林戦隊長以下の第三中隊（舟艇十五隻があった）も同じくバターンに向かう予定であったが、戦隊長との合流が遅れ、

折柄の大潮の干潮の時刻に一致してしまい、舟艇の大部分が干上がった泥の上で動きがとれなくなり河口に残ってしまった。このため残った隊員は砲爆撃等を受けて舟艇を失うと共に多数の戦死者を出す事になった。十一日から十五日までのこの地域における戦死者は二十名になっている。しかし若林戦隊長以下一部の隊員は横断に成功した。

なお戦隊長の富田少佐は、戦隊員をバターンに移動させ、自らは基地大隊の一部と、一七、一八戦隊の一部を指揮して、オバンドで戦闘に従事していたが、二月十三日にバターンに転進中、マニラ湾上で戦死した。（一説ではオバンドの陸上戦闘で戦死したともいわれる。）

バターン半島のリマイに向った山之内中尉らは、二月十二日に同地付近に到着した直後に、米軍の空襲によって舟艇は全滅した。

人員は辛うじて同地上陸したが、偶々この日にバターン半島のオリオン付近に新米軍が上陸を開始したため、山之内中尉らは二月十五日以後バターン半島のナチブ山に退避し、ここで鉄部隊（第一〇師団で、姫路で編成した）第三九連隊第二大隊に合流できたので、以後五月

まで同部隊と行動をともししていた。

しかし五月に至り、山之内中尉、石井中尉、石橋少尉の各中隊長は、戦隊員を伴い米軍占領地を突破して、軍司令部のあるバギオ方面に北上することに決定した。(この時期、既に方面軍司令部はバギオを放棄しバンバンに移動していたのを知らなかった)

一部の患者の隊員をナチブ山中に残留して出発し、米軍の占拠しているオロンガボクデナルピアン街道の突破には成功したが、道路突破後、隊の前後が分断してしまつて連絡が不能となつたまま北方の山中に入り、以後そのまま分散的に行動をとらざるを得なくなつた。

それ以後の行動について全体を把握することは不可能であるが、一部の隊員が六月十五日にクラーク平原中にある、米軍が占拠使用中のデルカルメン飛行場付近に斬込みを行つたのを始め、米軍やゲリラと交戦しながら自活していたが、結局はクラークフィールド西方付近の山中で自滅状態になり、目的地のバギオ方面に達する事はできず二十年九月終戦を迎えた。この地区からの生還者は七名で、二月中旬から八月にかけてこの地区での戦死者数は四九名であつた。

こうした戦闘のため、同戦隊は将校十名、隊員八〇名、下士官二名の合計九十四名の戦死者を出している。

戦後、(昭和四十九年)「第二中隊長石井不二郎大尉の陣中日誌」が遺族の元に帰つてきた。戦時中に米軍将校が手に入れたものらしく、在米日本領事館を通じて返還されてきた。

日誌は昭和十九年九月より始まり、同二十年五月二十五日迄で終わつていて、以後の詳細は不明である。

然し、これによりその間の「同大尉(第二中隊長)」の行動、特に二十年二月以降の同中隊のバターン半島ナチブにおける状況の詳細を知ることが出来る。(別掲手記参照)

海上挺進基地第一七大隊は、暁第二八九四部隊と称したが、比島現地では防諜名として漁撈第一七大隊と称していた。

昭和十九年の九月十二日に水戸連隊において、大隊長上田孝信大尉の下に編成を行ない、十月六日宇品を出航し、海上の損害なく十一月十一日マニラに着き、同月の下旬にはバタンガス州バラヤンに南下し、同地で舟艇基地の設営を行なつていた。

その後、作戦計画の変更により、戦隊の駐屯地が、マニラ市北方のオバンド及びパコーに変更されたため、バラヤンを撤収して十二月上旬にリサール州オバンドに移動し、ここで改めて基地設定業務を行なつた。

昭和二十年に入り、一月九日米軍のリングエン上陸に伴い、中旬に勤務第二中隊を、マニラ街道の要衝のメイカワヤン(マニラ北方四キロの地点)に派遣し、リングエンからマニラを目指して南進する米軍を阻止するため、同地で陣地構築作業に当たらせた。

しかし同地区にいた守備兵団は、いずれも山岳地帯で持久戦闘を行なう方針で、山地に陣地を構築し、主力部隊は撤退していたため、二月一日にはこの第二中隊がメイカワヤンで、直接米軍の第一陣と戦闘に入ることとなつた。

当時大隊の主力は、なおオバンドに陣地を構築していたが、第二中隊に対し命令を出し、米軍と接触しつつ被害を最小限に止めながら逐次後退させ、二月五日にオバンドの本隊陣地に復帰させた。

二月十日には、オバンドも米軍の戦車兵団の攻撃を受けるようになり、激戦の後、大隊はダンバリットに撤退するに至つ

たが、この頃までの戦闘で、兵員は約三分の三百余名となった。

更にダンバリットでも戦闘が行なわれ、二月二十二日にマニラ東方部の、日本軍のこの方面での主たる守備地域であるモントラルバンに集結し、ここで他部隊とともに戦闘を続行した。

三月一日には通称五訓山に退き、ここで防禦陣地を構築していたが、四月十日頃には同地に残った生存者は十数名となっていた。

同大隊の総員は、八九〇名であったが、このうち八六六名が戦死し、生還者は二十四名に過ぎないとされている。

### 帰ってきた陣中日誌 ルソン戦記

#### 第十七戦隊 石井不二郎

はじめに

昭和四十九年十二月海上挺進第一七戦隊第二中隊長石井不二郎中尉の「陣中日誌」が戦時中米軍の将校に拾われたのを、米国の日本領事館を通じて遺族宛（御母堂石井 ムツヨ）に返還されてきた。

不二郎中尉のご母堂はこれを編集して、亡くなった不二郎氏の各部下のご遺族に送付した。

海上挺進第一七戦隊の主力がオバンド

よりバターン半島に転進した後の全体の状況は全く不明であったが、この「陣中日誌」によってようやくその詳細を知ることができた。

本稿は昭和十九年九月より始まるが、長文になるので、オバンドまでの前半分を割愛し、バターン半島転進後からを掲載する。（本稿中も冗長なところは一部割愛した）

#### 陣中日記（遺稿）

##### 海上挺進第一七戦隊 第二中隊長

##### 故 石井 不二郎

二月十一日紀元節（バターン半島に向かつて出発）途中、方向誤ってバターンにつかず。オバンド岸北二十軒附近に到着す。日没と共に出発。バターンへ向う。途中、波相当に高く困難なるも翌朝三時頃つく。

二月十二日 六時半頃どうにか偽装終了。人員を陸上に上げるや、戦闘機四にて反復十数回に亘り、舟艇に対して銃撃を受く。近づくを得ず残念。人員には異常なし。（若干の負傷者あり）

夕刻、小生は二名連れて宿营地偵察へ宮井見習士官をリマイへ連絡にやる。宮井帰り来り、山之内中尉外三十名と合し、誘導し来り再会を喜ぶ。

二月十三日 海岸近くは危険なるを以て、山の手へ移動を決心したるも、患者を連れての一夜機動は困難なるを以て、オリオン部落に止まるに決す。オリオンは毎日の銃爆撃にて相当焼かれ、人は殆ど住まず、ここに宿営す。昼、数回となく敵機来るも何等損害なし。

日没後出発。途中、無事ピラールに着くや鶴田見習士官（第十七戦隊本部小隊長）以下十七名に遭遇、喜ぶ。友軍、マリベレスとサマツトの中間地点にあるを知り、ピラールより山へ入る。森林中に宿営。

二月十四日（注・第一〇師団歩兵三九聯隊に合流）

夜が明けると。又々敵機の天下。木の下にじつと歯をくいしばる。十二時頃、山之内の意見により、大西、竹内両見習士官を将校斥候として出し、夕食の準備位置等偵察を命ず。出発後、しばらくして伝令来り、大西、竹内共に「テロ」にやられたとの報、速やかに二十名を以て救援に行く。大西、右胸部貫通、竹内、腹部・肩の貫通にて竹内は遂に戦死す。現場附近を搜索して仇を探したるも遂に得ず。

兎に角、本夜を最後に友軍に遭わざれ

ば斬り死の決意にて出発。担架、昨日よりの疲労にて前進の如くならざるも敵前二軒附近を突破し、マリベレスとナチブの中間地区に向い急行す。二十三時、遂に待望の友軍に会す。第一〇師団(注・鉄兵団)歩兵第三九聯隊第二大隊なり。大隊本部迄、更に八軒元氣百倍、四時頃に着き珍しき米の飯を喰い寝て元気づく。

(注 以下歩兵第三九聯隊内にて行動) 二月十五日歩三九聯隊第二大隊に到着正午頃、軍医殿も来り、初めて患者に手当らしい手当をして頂き、中隊長としてやっと申し訳の出来た様な感なり。部隊の現況は現在山へ移動中なるを以て、吾人も明早朝より移動に決す。友軍の暖き手中にありて嬉しきも、オバンドとダンパリットを思えば感慨無量なり。

(付記・歩兵第三九聯隊は輸送船が撃沈され、ルソン島に上陸したのは聯隊本部、第二大隊(5・6・7機関銃中隊)、第三大隊(9・10・11機関銃中隊)のみであった) 第二大隊は主力と離れマニベレス山とナチブ山の中間にいた。当時ナチブ山北方の聯隊主力が苦境に陥つていたのである。二月十六日 四時起床、五時出発。谷川を渡り、バナナ畑を超えて、担架を持つて前進。空林三ヶ所あり、夜明け迄に通過をするを要するを以て大いに急ぎ漸くにして通過。途中、敵機の攻撃を受けざるも常に頭上にあり。十三時頃、漸くにして大隊本部へ着く。大隊長殿(山本庄蔵少佐・少尉候補者十八期・21・6・5復員)にお会いし、部隊中に入り、我が中隊は第七中隊〇〇殿(注・判読不能なるも戦史によれば橋本静雄中尉・復員)の隊に入る。患者、大西・酒向見習士官、比留間・常見・池田・好美伍長は本部の患者収容隊に置く。親身のもてなしを受け、有難し。中隊の人間となり、大いに頑張らん。

二月十七日 落ち着いた一夜を明かした。実にパコを出て二週間振りの事だ。而して此処も敵の飛行機により銃撃・爆撃を受けつつあるは変りなし。あの迫撃砲弾も段々と近づきつつあり。但し吾人は日本人だ。皇軍だ。数回死線を越えた人間だ。此の中隊と共に死なん。二十名全員元氣なり。

二月十八日 朝より敵機の攻撃何等変る事なきも、敵迫撃砲陣地を推進しての猛射には一寸困る。敵は、本道沿いに相対し、前進した様子。夜に入つて迫撃砲の射撃は実に猛烈となった。二月十九日 予が部下は全部各小隊(注・歩三九聯・二大隊、七中隊の意か)に分属せしむ。小なりとも今迄に受けた仇を討つのだ。討たせたいの一念だ。二月二十日 部隊は現在附近に於て戦闘するに決し、陣地にありたるが、敵の優勢により不利なるを知り転進に決す、中隊は、転進掩護の任に服す。二月二十一日 昨夜より今朝にかけて迫撃砲の集中射撃を受け、一夜寝もせず。近々三米にも落下したが未だ生があつた。土を頭からかぶつたのみで何ともなかつた。昼頃、敵の迫撃砲陣地へ斬り込み実施ということ、岩谷・中田・(注・丈夫氏・特幹・復員・青森)が元氣一杯やつて来たが、さあ出発と云う時に大隊長殿がこられ、「状況、敵は大兵団を以てバターンを南下しあり。現在地に於ての抗戦は不利なるを以て、速やかに敵から離脱するの要あり」との事にて陣地撤収、転進に移る。途中、患者、大西以下六名を掌握す。(注・武器もなく、陸戦訓練も未熟な少年隊員を連れて他部隊に寄寓を余儀なくされた海上特攻隊長の苦衷、察するに余りあり)。約十数軒前進して

露営する。

二月二十二日 早朝出發、前進を開始す。各人、一ヶ月分の米携行。吾輩も米約二斗余りを肩にす。

三軒程にて行きづまり、密林に道を求むるも得ず。遂に又露営。敵未だ近く迫撃砲の弾着、千乃至千五百米にあり。米の飯が喰えず、乾パンにて終日過ごす。

二月二十三日 六時出發。又道なき道を地図を頼りに前進を開始す。

二月二十四日 昨夜より今日一日、現在地にて休養。米の飯の旨さ格別。

二月二十七日 夕刻、鶴田見習士官の指揮下にあつた小堀伍長（注・特幹・小堀定次）が敵中を突破し、吾の処に連絡に来る。他の消息不明、夕方、山之内中尉が部下三名を連れてやって来て一泊した。別れてもう一週間にもなつたと思う頃であり、お互いに他部隊に居れば話が尽きなかつた。小堀を山之内に引き渡す。

三月一日 山之内（中尉）と共に起きる。海軍兵来る、聞けば大発特攻隊（注・海軍保有の魚雷装備の大発動艇）とかで、マニラより吾人と同様にバターンに來り、再挙を図る企てらしかつたが、なりゆきも同様にナチブ山中に來たらしい。隊長は前田海軍大尉殿（注・末雄氏・マニラ

海軍防衛隊所屬・第三一海軍特別根拠地

隊・魚雷挺進突撃隊・マニラ戦鬪後大發でパターン半島に渡り「ナチブ」山の戦鬪にて20・4・15戦死）。

三月四日 大隊長殿の意見で吾々のみ一緒になつてやつては如何と。山之内はそれがよいと云う。吾人も同様だ。一つの部隊だ。戦隊長の指揮する海上挺進第一七戦隊だと思つと、一緒になつて一つの単位部隊を作り協力し合つて戦隊長の意志を継ぐの要あり。枯れても中隊長だ。意地ではないが、拝命した中隊長だ。中隊長らしく働き、死にたい。

三月五日 山之内來り、漁撈隊（注・陸軍海上挺進戦隊及び基地大隊の秘匿名）は一つに纏る事につき意見を交換し、種々協議の上明日山之内が大隊長殿の処へ行

くこととして別る。

三月九日 午前八時、全員集合。橋本中尉（注・静雄氏・第一〇師団・歩兵第三九聯隊第七中隊長・復員）に申告。糧秣を受領して集結予定地に行き、患者も集結、十四時頃終了。十五時、大隊長殿訓話に集合。其後申告又山中を帰る。

三月十日 陸軍記念日 命令による集結の日だ。朝より待つて山之内が來たのが昼近くだ。それより大体の運営を考え、

宿舎を決定して落ち着く。

三月十一日 早朝出發。山を下りて芋堀りに行く。敵が出るかどうか。全く芋堀りも命懸けだ。どうにか畑に着きバナナ・芋をとつて帰る。先づ第一日目事故なし。

芋二食に米一食にて過す。ビナンガンを出て一月だ。

三月十六日 代用食の芋が切れたので芋堀りに行かねばならぬようになったが状況不明なので、岡崎（注・忠司氏・特幹・20・6・16於ナチブ山戦死）を状況調査にやり、先ずよからうと云うところで十四時出發、前進拠点に到着。

三月十七日 未明出發、相当前進してやつと芋畑らしきものを発見して作業す。約三時間作業、下の方に銃声・迫撃砲の音を聞く。十時三十分引き上げ、十一時三十分頃帰り着く。芋堀とはいいながら戦鬪だ。神経を使う事甚だしい。午後、山之内が隊長集合で帰つたが、一時間半もしたと思う頃、伝令が帰つて来て途中に敵約一ヶ小隊が出現し通れぬと云つて來た。第七中隊と新井隊（注・歩兵第三九聯隊に配屬されていた独立歩兵第三五九大隊第二中隊／第一〇五師団・中隊長新井泰雄中尉・20・11・25復員）との



中間らしい。えらい処へ敵が出たものだ。明日の芋堀りが一寸気掛りだ。

三月十九日 岡崎が連絡に来ていて、石橋(注・幸夫氏・少尉・陸士五十七期・海上挺進第一七戦隊第三中隊長・20・6・20於クラーク戦死)と二人、協議事項あるを以て拠点に帰る様にとある。消耗大なるも勇を振って帰る。十八時三十分着。隊長会同の結果、

一、比島一般の戦況は、北部ルソンは我が手中にあるも、南部は敵の勢力圏内にあり。

ここバターンも敵中なり。

二、故に聯隊(注・歩兵第三九聯隊)はナチブ山頂附近を本拠とし、軍旗と共に生き、死ぬ 決心。而して、敵を刺激する事なく自活により生活し、先ず今年一杯を目標として尚武兵団(注・第一四方面軍)の攻勢を待つ。第二次として、来年三月の約一ヶ年を目標とする。

三、我が部隊(注・海上挺進第一七戦隊)は、之に基き現在地附近にあつて自活するや、パンコール附近にあつて自活するやの二つの問題あり。二十四日迄に決定すべしとある。

吾人の考えは、パンコールを可とす。

三月二十一日 山之内中尉、アブカイ方面拠点偵察の為、岡崎以下七名を連れて出発す。

三月二十四日 聯隊本部に向う。午近くに着き、軍旗を揮す(注・旗手・柏原振一少尉・陸士五十七期)。明治三十一年に拝受せるものとか。歩兵第三九聯隊長(注・永吉夷大佐・陸士二十八期・復員)と会食し、種々話あり。

四月一日 遂に四月となつた。攻勢を期待した四月だ。何かよい事もあらんと最後の搜索の為、リマイ方向へ行く。炎天下、大いに努力するも遂に益なし。暁にナチブの山を見る。

四月四日 吾人不在間、糧秣の収集は概ね順調に進行しあり。芋の収穫は相当だ。今日より糶の搜索の為、斥候を派遣す。兎に角、候補生が長になって仕事をやる様になつたから大したものだ。未だ伍長として充分ならざる者、多々あるも、此の調子で二ヶ月やつてゆけば相当立派な者になるだろう。

四月八日 大詔奉戴日。情報によれば、敵は沖繩本島に上陸せりとか(注・四月一日)。愈々敵は本土に迫る。皇国の興廃実に近きにあり。吾、断じて米英を討たん。

四月十日 昨日の計画通り、各小隊毎に各々出発す。聯隊本部(注・歩兵第三九聯隊)より副官岡本大尉殿(注・武氏・21・6・5・復員)来り、移動の為の視察をなす。

四月十三日 北部ルソンへ行く計画を練つて心を慰めて山之内と話す。四月十四日 会議の為、山之内は山へ出発した。

四月十六日 午近く、山之内が帰て来た。会議は大した事はなかつたらしい。各隊、相当糧秣に困っている様子だ。

四月十八日 情報、次の如し。

「我が航空部隊は、沖繩近海に於て、敵戦艦其の他、多数撃沈破の戦果挙げあり。尚、陸戦は、反撃に出で敵に八千の損害を与えあり。ビルマ戦線は、ラングーンへ南下の敵と交戦中。外電によれば米大統領ルーズベルトは脳貧血にて死亡せりとか。ドイツ戦線は、米軍ベルリン四十マイルに進出せりと。」

四月二十一日 マニラ方向に轟音盛んなり。又数回に亘り、海岸に爆撃音を聞く。友軍なりや、敵なりや不明なるも、何だか戦果躍動の感あり。

四月二十三日 敵は、愈々ナチブ攻略戦を開始せるか。山へ盛んに道路を作り

つつあるものの如し。

マニラ西海岸の砲爆撃音未だ盛ん。思  
うに、沖繩作戦に連繋せる比島作戦の開  
始か。又吾人漸くにして六月迄の米を持  
ち、自活を企図しあるも、斯る状況にて  
自活も成功図り難く、

「生ある限り、ボロ附近（注・二月三  
日以降マニラ湾縦断に出発する二月十日  
頃までの間の戦鬪を指す）の戦鬪を軍司  
令部に報告し、吾人又新に仇敵と一戦を  
交えるべく、北部ルソン行の決心の時機  
と判断し、大概決定し、決行の為の準備  
にとりかかる。」

四月二十五日 大隊命令受領し来り、  
大体の戦況を知る。命令に依り、キャプ  
タン附近の敵迫撃砲陣地へ斬り込みを実  
施すべしとあり、直ちに人選し、三組、  
十四時出發せしむ。人名次の如し。

### 第一組

芳川

西田（注・桂次氏・特幹・20・5・

30 於パン。パンガ州クラーク戦死）

### 第二組

沢田（注・正氏・特幹・20・6・8

於パン。パンガ州クラーク戦死）

田淵（注・栄一氏・特幹・20・5・

30 於パン。パガ州クラーク戦死）

### 第三組

小堀

田中（注・秀雄氏・特幹・20・6・

14 於パン。パンガ州クラーク戦死）

斬り込みの成功を祈り、蔭膳を作る。

十七時頃より前半夜にかけて、マニラ方  
向に爆撃音と高射砲射撃音を聞く。

四月二十六日 午前中平靜。斬り込み  
未だ実行せざるか。

四月二十七日 本日、朝より平靜。

新たに二組を派遣す。十一時出發。

一、岩谷

二、窪田 岡崎

四月二十八日 朝より大なる変化なし。

斬り込み未だ帰らず。明日の天長節の佳  
節を祝すべく、餅つきを準備す。

四月二十九日 天長節 ナチブ山中に  
敵と対しての天長節なり。ルソン、沖繩、  
ビルマ戦線香しからず。

夕方、第一回目の斬り込み二組（一、  
二）帰来。成功せず。但し、予定より二  
日間を加え、糧秣なきも任務遂行に頑張  
りたるは可なり。

外電に依れば次の如し。

（一）ベルリン包囲の中にあり。ソ  
連軍突入。

（二）ウィーン陥落。

（三）沖繩激戦中。

（四）サンフランシスコに於て四十  
六ヶ国会議を開き、戦後の平  
和会議とか。

（五）米国大頭領ルーズベルトの後  
任は、トルーマンとか。

四月三十日 夕刻、岩谷、窪田、吉井、  
小堀、の組、前後して帰来。報告に依れ  
ば、岩谷、小堀の組は、敵迫撃砲陣地に  
行きたるも、敵の陣地変換の後にて攻撃  
するに至らざりきと。敵の自動車若干を  
台上に見た。又、陣地附近に携帯糧秣散  
乱し、砲弾あり、無線用バッテリーあり  
で、相当慌てて撤収したる様子。兵力百  
内外。迫撃砲は八十一耗（注・口径）の  
如し。斬り込み隊員の獲得持参せし糧秣、  
ビスケット、及びタバコを御馳走になる。  
ルーズベルト給与なり

五月一日 速やかに北部ルソンへ行き、  
新に打倒米英の陣頭に立つ（事務局 注  
僅かばかりの兵員で、北部ルソンにおい  
てどんなことが出来るのか？何をするの  
か？具体的目的が不明確である）を要す  
るを以て決行に決し、十四時、山之内と  
二人出發。大隊長殿の許へ許可を得に行  
く。

夕刻、大隊長の処に到着。決心を話す

と喜んで元気づけられた。部隊（注・第一〇師団歩兵第三九聯第二大隊）の現況も又、北へ斬り込むの時期は六月に迫ったと云っておられた。今迄の戦闘にて、敵に与えたる人的損害八十五名とか。第七中隊の戦死者八名。第七中隊の位置に相当戦利品のあつたのは気持ちがよくつた。

五月二日 朝出発、部隊位置に帰る。情報次の如し。

- (1) 沖縄近海は、四月二十一日から二十八日迄、天候悪き為、特攻の活躍充分ならざりしも、二十九日より天候恢復、大いに活躍し、戦艦、巡洋艦等三十八隻を撃沈破大せり。ここ数日が戦機にて、特攻、航空部隊共に大いに頑張つて いる由。
- (2) ミニッツ軍の発表に依ると、日本軍爆撃機はロケット弾を使用しているとか。

- (3) 四月二十八日、ドイツ最高司令部は、聯合國に対して無条件降伏せりと。日・独・伊のうち、伊先ず降り、又、独も米鬼に降る。独り、我が日本のみ敢然として戦勝に邁進しつつあるは実に有難きことだ。今更にして、皇國の有難き、皇軍の強さをはつ

きりと知る。独も又、単なる西洋人の國家に過ぎなかつた。必勝、吾人は断じて勝つ。

五月四日 早朝、部隊に先発して奥の拠点へ行く。大隊長殿に挨拶の為だ。

午頃到着し、石橋少尉と共に大隊長殿の処に行く。喜んで送つて頂いたが一寸名残惜しい気持ちがあつた。帰りに聯隊長殿にも挨拶し、元気づけられた。

沖縄の戦況左の如し。

- (1) ここ数日、我が特攻隊、航空部隊の活躍と地上部隊奮闘により、当初一四〇〇隻の艦船を有していた敵も大小一〇〇内外の由。
- (2) ヒットラーは死去せりと。ヒットラーの代わりとしてカール元帥が頑張つて いるとか。
- (3) サンフランシスコ會議は、相当ソ聯の横車でもめて いる由。

五月五日 (注・歩兵第三九聯隊と別れ北部「ルソン」へ)

愈々北部ルソン行きの第一日だ。依頼に依り、前田隊(注・前出・前田海軍大尉指揮の海軍大発特攻隊と思われる)及び、コレヒドール島よりの報道班員も一緒に行くことになり、総勢約100名だ。五月六日 第二日。正午、オラニー

河の上流へ出る。第三大隊長・小川少佐殿とお会いして最近の世界情勢と判断を聞く。以下述べん。(注・この時、小川大隊は二月上旬からの戦闘で八十名に減じていた)

小川少佐殿の状況判断  
一、結論

世界戦争、遅くとも本月一杯に終了する。而して、各国、概ね戦前の状態復帰なり。  
二、理由

イ、戦争開始後既に四年近く、各国共に疲れあり。特に、日本は南方資源の入手を断たれ、戦争続行は困難だ。  
ロ、米英対ソ聯の關係は、ドイツの降伏と、ルーズベルトの死亡により面白くなつた。結局、今から世界を左右するのは、ソ聯のスターリンである。

ハ、日ソ間は、今まで友好的に保たれて来て居り、米ソ間に日本の存在は必ず必要なものである。依つて、吾人は、日本の滅亡を賭して飽くまで戦うことを考えると同時に神州日本護持の為に和平の来ることも又望まねばならぬ。

比島に於て、今迄の如き生活と戦闘を止した吾人にとっては癪に障ることだが止

むを得んことだろう

五月八日 大詔奉戴日 今日もまた因

縁の日だ。宿営地を出て、若干歩き休止。又前進、森林中を次の川へ行き宿営す。

五月九日 実に蚊の多い処だ。斥候の報告によれば、森林を抜けるまであと六百米位であり、自動車の通った跡のある道路ありと。又目標の「マラシンボウ」も見えているとか。

石橋少尉、岡崎の二組の将校斥候を派遣して、道路（オロンガボクデナルピアン街道）突破の準備にかかる。十一時頃より雨。

五月十日 午前、石橋、岡崎の両将校斥候帰来。大体の状況は判明する。

決心。本夜、突破せんとす。十六時頃より雨を待ちて炊事準備完了。十八時出發す。（オロンガボクデナルピアン街道を突破して北部ルソンに向かう）

バナナ島、森林中等、薄暮に乗じて下ること数軒にして夜となる。（注 敵の監視下の道路等を突破する際は、先行したものは、後続の来るのを待って、全員が揃ったのを確認して前進するべきで、行軍の原則を忘れてしまったのか？）

後方の連絡切れ、搜索三時間。遂に第二、第三小隊の十五名、鶴田、酒向不明

となる。

それより行くこと二軒にて河あり。河

の向う百米位に問題の道路。初め河水深く、渡河困難。上流より渡河決行、道路の近くに出る。途中、時間を取り夜明近くになる。途中部隊の後方続かず。又、主力を失い、十二名にて突破。

五月十一日 昼一日、藪の中に居る。何回も何回も、偵察発砲しつつ十米附近を通るも何等発見することなし。

夕刻、又一回、宮井をして連絡さすも不明。炊事後、前進して山中に入る。現在、予の部下として掌握しあるもの、

宮井見習士官、鎌田伍長 谷田伍長  
岡崎伍長 東條伍長。

五月十二日 夜明二時間程眠り、道路偵察後、千米位前進開始。何回も稜線を越え、十二時頃、後一つの稜線にて「マラシンボウ」と云う所で昼食、休む。第三小隊の木村掌握。間道発見前進。遂に目的の道へ出る。

行くこと三十分にして現住民の話を聞き、大いに警戒するも何等変化なし。川あるを以て炊事。ゲリラ小屋の跡にて宿営する。木村の言に依れば、大西概ね残余隊員を指揮し、昨日、突破に成功せ

るものの如し。兵力は二十名内外にして、若干の行方不明者あるらしい。

五月十三日 朝飯を食し、昼飯を炊いてゆつくりと準備する。コレヒドール島より来た海軍さんが通りかかり、鶴田見

習士官以下十八名に会ったと云い、大西出発を中止し、後方へ搜索斥候を出す。但し、皆目不明なるに依って前進する。

一軒にて前方不明、間道なし。急坂登り、或は降りたるも何等益なし。道路上に宿営する。

日没前、岡崎の斥候にて一軒先の事情判明したるを以て、希望を持って寝る。

五月十四日 デナルピアン道を突破後、早くも四日だが、部隊の掌握も初期の間道にもぶつつからず、山中に迷うのみ。昨日の道路に基き前進。一軒余りにて

ゲリラ小屋にぶつかり休む。次の前進にて、又々道無く迷うこと二回にて、又ゲリラ小屋に入る。展望するに、余り西へ来すぎた様だ。前進方向へ一人、後へ下がって右へ行き直すのに二人の斥候派遣。

吾、未だ日は高きも宿営に決す。米軍がリンガエンに上陸する迄は、米比軍ゲリラ部隊の居ったゲリラ小屋に一迫するこ

とにした。茅ぶきで竹の柱の家だが、なかなか器用に出来ている。食卓なんかを竹で作っているのは彼等らしい。相当数居たらしいが現在、全く吾人が彼らと境遇を逆にしてここへ泊るかと思うと実に癪に障る。

今日も昼から夜中までよく降った。

五月十五日 朝からゆっくり休み、何等な事なし、雨もよく降り、寝て話すのみ。話も何かすればすぐ食うことに落ち着くのも又やむを得ない。ただ情報を知りたい。五月三日以来、知らぬのだから相当変っている事だろう。

夜間、デナルピアン、マニラ其の他の都市には、皆電灯がつく。自動車がない。トをつけて走っているのはがっかりする。戦争は飛行機だ。飛行機なしの戦争はあり得ないの感を特に深くする。終日、敵機を頭上に見て、ただ腕を撫するのみだ。

東条の斥候帰来。間道は明らかならず。決心。一旦、平地に出てマラシンボウの北に出るに決す。

五月十六日 早朝、ゲリラ小屋を出発、山を下る。四日も費やした行程を約半日で道路の近くに出ってしまった。あまり調子よく出て、道路の近くに出て、ゲ

リラと会いそうになったのには驚いた。マラシンボウの真東に十四時頃出た。

部隊の前進したる跡を発見。それをつける。又、渡辺伍長の装具の捨てあるを見る。四料程、つけてなくなつたが、日没になつたのでゲリラ小屋を見つけて休む。近くに銃声が出てうるさい。米も今日を以て終わりだ。ゴタツト附近まで前進した。

五月十七日 早朝に出て北行。稜線を二つ越す。北方に「カルメン飛行場」あり。実に大きなもの。バラック幕舎が建ち並び、タンクあり、飛行機の発着頻りだ。又附近に高射砲陣地もあり、一大都市を現出している。飛行場には、大小の飛行機が悠々と翼を休めている。

今日も又、正規兵三、ゲリラ十二、三名の巡察が近くにやつて来たが、何ともなかつた。愈々今日より糧秣がない。糧を敵地に求めざるを得ず。

五月十八日 昨夕より機動開始。カルメン飛行場の近くを北行する。途中、再三民家を見るも空なり。飛行場附近なるを以て退避を命じてあるらしい。飛行場は、明々と電灯をつけているのは癪だ。夜中、パイヤの汁を炊き、一日分の食事とする。夜明け近くに稜線の上に停

止して休む。バナナの芯をかじつて食とする。

日没前二時間出發。飛行場真下の相当大きな河の渡渉に漸くにして成功。飛行場を眼下に見る。電灯明るく丁度人口十方位の大都会だ。映画もやっているらしい。口笛もする。音楽もきこえ癪に障るばかり。ヤンキーが世界にのさばっているのがいいのだろうかと思ふ。

クラーク飛行場にいたという航空廠の兵に会い、此の附近もバターソンと大差なく、それ以上だと云う事を聞く。実に、数万の日本兵が、何等な事もなく食を求めて生活し、病に倒れているかと思ふと何とも云えぬ。

飛行場を去る四料位の丘の上に泊まる。五月十九日 食なくして三日目だ。相当に腹にこたえる。飛行場の様々の音を聞きながら休む。

大西・鶴田見習士官等との連絡は全然とれず、糧秣もなし。一寸、問題となつて来た。

「吾人は断じて生きるぞ」の信念は、尚一層堅くなつて来た。

十六時頃、敵中なるも出發する。行くこと、五百米位にて芋畑にぶつつかり、敵機の下で芋を掘る。どうやら芋にはあ

りつけた。食なくして三日目、芋の旨い事。月を利用して明日の分迄掘る。

五月二十日 昨夕炊事したところより一寸北に寄った沢に入り休む。日中は、バナナの葉の下で、昨日の芋を喰って過す。

十七時より芋堀開始。パイヤも手に入る。熟したパイヤは何十日振りかだ。実に旨かった。芋汁を作り、明日の為に芋をふかして、今日は住民の家襲撃と山を降る。降ること四軒位いで民家あり、言葉通ぜず。ガタガタ騒いで、附近の間やゲリラも来り、発砲されて遂に失敗す。

山之内中尉の主力と離れ、小管・岡崎少尉・村上兵長（注・一七戦隊名簿になし）の三名となる。夜明けまで探すも見当たらず。

昨日宿営した所へ帰って見たが居らず、附近にて休む。

昨夜の騒ぎの關係で、早速、正規兵がくり出して来たらしい。軽機関銃の射撃音、又迫撃砲もあるのには驚いた。一寸不安の気がしたが何ともない様だった。さあ今からどうしようかだ。三名となつて一寸淋しいがやむを得ぬ。今夕迄、此処に居て会せざれば芋でも掘って北行す

ることに決し、先ず村 upper をパイヤ採りに出したところ、山之内等に会った。山之内は、若干頭を怪我していたが、其の外、鎌田・谷田行方不明の外、異常なし。よかつたと云うところで芋を堀り、汁を作り、ふかして食う。旨い事。

五月二十二日 早朝出發。昼中北行する。途中、砂糖きび畑の刈った跡を通り、残りを嚙じつて糖分の補充をする。

飛行場の付属着陸場の如きもののあるポーラク（注・クラーク飛行場地区の南方・アンゲレス南西）の附近迄前進する。稲の実っているのを発見、月明りを利し収穫す。全部で一斗位にて止む。

東して三軒四名の日本兵に会す。クラークの航空廠の仙波少佐殿（注・広一氏・マニラ陸軍航空廠・20・5・20於モンタルガン戦傷死）とか。衣服破れ、靴なしの毒な姿である。日本は、これでいいのか。

五月三日以来、全般の状況は如何なるや不明である。此の情況に於ては、比島にては絶対攻勢はあり得ない。吾人等は、何を希望に生きるか。

唯、神州日本の不滅を信ずるのみ。

五月二十三日 「ポーラク河」支流を上り、山中に休む。夕方迄休んで昨日芋

を掘ったところへ前進する。

途中、ゲリラ小屋あり。芋畑もあるの で、ここで芋を堀り夕飯だ。夕飯後、前進して芋堀り。帰来して夕食をやつて寝る。

五月二十四日 目を覚すと、日早や高し。直ちに起床して山中に入る。芋許り喰って生活すること一週間になるが、その身体には応えぬ様だ。銃声は相変わらず近くにすることも何等変ることなし。

夕方、再びゲリラ小屋に帰り夕飯。芋堀りに出かける。今日は相当掘った。畑の中で骸骨を見た。日本兵らしい。ゲリラ小屋で寝る。昼あまり寝れんのでよく寝た。

五月二十五日 日がさし始めてやっと目をあげ、朝食だ。

今日は凶々しくゲリラ小屋で昼も寝ることにする。銃声がうるさい。敵機の多し。

変つたのは、昨日からP51が五十機位の編隊で飛ぶことだ。兎に角、敵機の多いのには、癪に障ったり、驚いたりだ。

（注 「陣中日誌」は以上で切れている。

昭和二十一年五月二十八日、生還した好美伍長より、ご母堂石井 ムツヨ様宛

次のような問い合わせの手紙が届いた。  
前略 陳者、小生広島船舶練習部富田  
隊以来御令息不二郎様の部下として比島  
に派遣せられ、十九年十一月二十日頃マ  
ニラに到着し、二十年五月中旬迄石井中  
隊長と行動を共にして居りましたが、食  
料欠乏の為自活生活に入り、不二郎様と  
別れて生活して居ました。六月六日クラ  
クフィールド飛行場南方で偶然会った戦  
友の話により中隊長以下十名位飯盒炊事  
中、米軍を合はせた比島ゲリラ兵の襲撃  
を受け、不二郎様は腕に貫通銃創及び復  
部に盲貫を受けられたそうではありますが、  
終戦後消息がありましたでせうか。切に  
不二郎様の御健康を祈ります。 後略

昭和二十二年八月四日。不二郎戦死の公  
報を受けました。(昭和二十年六月二十  
日比島。パンパンガ州クラークにて戦死)

石井 ムツヨ

漂流記

生と死の境に生きて

海上挺進第一七戦隊 浜 楨人

(日本出發より比島到着までは「戦歴」と重複するので省略します。)

マニラに上陸後、第三中隊は、同市バサイに駐屯し、舟艇は一旦、マニラ北方新築港に継留し、ここで整備を行っていた。十二月中旬、ダンバリットに移駐の

ため、夕刻、ここを出發したが、途中、エンジンが故障し、この時、わたしの舟に同乗の鈴木広治(第十七戦隊員)は、「泳いで行く。」と言って別れを告げ、救命胴衣を着けて泳いで行き、やがて見えなくなった。のちに知った彼の戦死の日時からして、この時、彼は無事ダンバリットに泳ぎ着いたようである。

故障で一夜明けた翌朝、遠くに海軍の大発舟艇が見えたので、手旗で救助を求めたところ、相手も私を認め、艇を曳航して、近くのコレヒドール島まで送って

石井 ムツヨ

連絡をしていただいたお陰で、翌日、石橋中隊長が迎えに来られた。私の舟艇の修理も終わり、燃料補給受領に、西海岸の給油地に行つたが、この時、近くに配備された海軍の「震洋特攻艇」の爆発事故が起こった。記録によれば、十二月二十三日、コレヒドール島南岸で整備中の艇が火災を起こし、多数の艇と隊員を喪失した。このため、石橋中隊長は、私が

爆発事故に遭遇したものと思われたのか、マニラへ帰ってしまった。私は、やむなく当時、同島にいた仲間の第十一戦隊と行動を共にせざるを得なくなったのである。

年が明けて、昭和二十年一月三日、十

一戦隊は、コレヒドール島から、マニラ湾の対岸、テルナーテ地区へ移動し、集結することを命令された。我々、特攻艇隊は、夜にまぎれて出發した。私の艇は、最後尾でそのうえ、故障している一隻を曳航していたため、どうも遅れがちで心配していたが遂にエンジンが故障して動かなくなってしまう。すぐに前の艇を大声で呼んだが、距離も百メートルぐら

いある上に、自分の艇のエンジン音に消されて聞こえないのか、そのままぐんぐん行ってしまつて、我々の二隻だけが、暗い海上に取り残されてしまった。

我々は曳航していた艇を放棄することにして、乗っていた二人は私の艇に乗り移つてもらつた。それから四人であり合

わせの板切で水をかいたが、ただ流されて行くばかりだった。近くの軍艦島へ助けを呼んだが、地下室にでもいるのか、姿も見えない。とうとう軍艦島も見えない程流されてしまつて四人とも、力つきて、狭い艇の中で、体を縮め合いながら眠ってしまった。翌日は、朝から整備兵の秋元上等兵が一生懸命にエンジンを修理してくれて、どうやら動くようになった。

「助かったぞ…」と私が小躍りして運転席に入つて、右手に見える陸地をめざ

して突進したが二〇〇メートルも進んだころ、トーンと大きな波が横なぐりに艇につき当って、ザーツと海水が雨の様に降りかかると、エンジンは力なく止まった。

もう一度修理したが、また直ぐに波を被って止まってしまった。今度は、もうどんなに苦労しても直らなかつた。「もう駄目だ。」みんながすっかり力を落としてしまった。

三日目も、まだ陸地は見えていたが、だんだん遠くなって行くように思えた。同じ「特幹」の岩井満(第十一戦隊員)は、このまま流されて行くのが耐えられなくなつたらしく、「一番近くに見える陸地へ泳いで行く。」と言ひ出した。無事に泳ぎ着けるかどうか、誠に心もとないが、引き留めても助かる見込みが薄いので、思いどおりにさせてやることにし、せめてもの心づくしにと、一つだけあつた牛缶も開けて皆で食べ、小山伍長のピタミン剤と、大切な水を飲ませてやつた。

出ている、ふかよけの赤い布が波間に見え隠れしていたが、やがて見えなくなつた。我々は、いつまでも彼の泳いで行つた方を見送つてどうか無事に陸地に泳ぎ着いてくれと、心で祈つた。

我々は、食糧を殆んど持つていなかった。この時同乗の小山伍長の乾パン一袋、牛缶一つ、各自が持つていた水筒の水、それだけだった。パンは、一食に五粒ぐらゐづつ配給したが、四日目ぐらゐになくなつてしまった。陸地も五日目ぐらゐから見えなくなつた。狭い艇の中で、体を寄せ合いながら横になると、話はきまつて食べものの話。それも美味しいものを、腹いっぱい食べた話ばかりだった。このまま流されて行つたら、だんだん餓死していき、しまいには、骸骨だけが艇と一緒に漂うことになつて、何処の誰れか判らないと困るからと言うので、各自の住所氏名を艇の甲板の裏へ書きつけた。

た。その時はさつぱりしたが、じりじりと焼けつくような、南の太陽に照りつけられて喉がかわいてくるのには閉口した。水筒の中はとつくに空っぽだ。胃袋の中までカラカラになつてしまった感じがした。

た。そのくせ小便は、毎日出るのだから、体の水分は減る一方だ。たまらなくなつた私は海水を飲んでみたが塩辛くて、少したつたら喉がカラカラと痛くなり、とても飲めたものではない。私は、また「小便は体から出たものだから、飲めないことはあるまい。」他人のものは汚いかも知れないが、自分のものなら飲めるはずと思ひ、小便を空缶にとり、少し時間をおいて飲んでみたがアンモニア臭くて、これも駄目だった。

そんな状態が続いたある日、急に風が涼しくなつたかと思うと、大粒の雨が、海面を強く叩きだした。この時は、本当に生き返つた気がした。飯盒のふた、中子道具箱のふた、ありとあらゆるものを艇の上に広げて水を受け、自分たちは死にかかつた金魚のように大きな口をあけて、少しでも多く口で受けようと夢中だった。びしびしと顔やからだに当る。雨足は目を開けていられない程強く痛いくらいだったが少しも苦にならなかつた。あ



まりスコールの勢いが強くて飯盒のふたなどでは、ポンポン跳ね出してしまつて少ししか溜まらなかつたが、道具箱のふたを立てて持ち、それに当る滴る雨水を下の飯盒に受ける方法では、割りに多く溜まつた。

顔や手に残つた水滴を掌に集めて、なめながら、やつと生き返つた。

このスコールのあとは、海は一段と荒れて、我々の小艇は大波に揉まれて空に高く持ち上げられたかと思つと、次の瞬間には周囲の海の方が、我々の頭より高くなるほど落ちこんで今にも海水が艇の中へ、雪崩こむかと肝を冷やした。だが艇は真ん中のエンジン部分の上と運転席のところだけを残して、その他は全部ベニヤ板で覆つてあるので、大波に翻弄されて何度かヒヤヒヤさせられたが、その度に危機を脱して沈没を免れていた。

陸地を遠く離れた海上だが、名も知らない小鳥が時々舳先に止まつて羽を休めていた。私はそつと這つて行き、捕まえようとするが、いつももう少しとこのころで逃げられていた。ある日とうとう捕まえることができてこおどりした。

ハトぐらいの大きさの鳥がハタハタもがいていた。久しぶりの食べ物にありつけ、羽をむしつて生のまま三人で分けて

食べてしまつた。足の筋や頭もしやぶつて食べた。また、私は舷から手を海中に入れて待つていて魚を手づかみにしたこともあつた。見たこともないとげの出た黒い魚だったが、これも瞬く間に生のまま三人の胃の中に入った。その後も、何とかして鳥や魚をつかまえようとしたが、そんなのろまなのは、めつたにいないと見えて鳥も魚も二度とつかまらなかつた。艇は、日一日と外海に流されて行くのか、だんだん海が荒れてきたが、夜になると不思議におだやかになつた。夜光虫でもいるのか見渡す限りキラキラと光り、金波銀波の畳を敷きつめたようで、空いっぱい銀の砂を撒きちらしたような星月夜とともに実に美しかつた。

十日目ぐらいから、体の衰弱がひどくなり腹がペコペコと凹んできた。頬の骨は突き出し、胸の部分は骨の上に皮膚が張りついているといった感じで、肋骨形がはつきり出てきた。幾日も何も食べないで、自分の体の細胞をエネルギーに変えて、生命を保っているだけだ。つまり自分で自分の体を少しずつ食い減らししているわけだ。

毎日、海と空ばかりを見て流されていると、唯もう寂しく心細くなつてしまつて十五日目ごろ、はるか遠くの空を、飛

行機が一機通つたときには、敵か味方か考えることより先に、あそこに人間がいるといううれしさから、思わず日の丸の旗を振つていた。それから、時々、遠くの空を見える飛行機に日の丸の旗を振つた。

ある日また、飛行機の爆音が聞こえた。その頃は、更に衰弱がひどくなつて起きる元気もなかつたが、何だかいつもより近い感じで爆音が消えず、かえつて、大きく近く聞こえてきた。そのうちに、ぐわあつと、一際大きな音とともに、大きな鳥のような姿が艇の真上を飛び過ぎた。(変だぞ)と思つて、上半身を起こしてみようと、また一機低空で飛んで来る。翼のマークは、○に星(★)だ。思わず「敵だ！」と叫んで見まわすと、夢ではないかとびつくりした。

大きな黒い軍艦が、直ぐ横手に浮かんでおり、間もなく小型発動艇が、我々の艇に接近して来た。私は「駄目だ！」と叫び、小山伍長に「自決しよう」と言つて、直ぐに短剣を抜こうとしたが、無念にも錆びついていてすぐに抜けなかつた。強く力を入れて抜刀して腹に刺した瞬間、敵兵に取りおさえられた。

手真似で「立て」と合図している。短剣をもぎとられて立上つたところ、みぞ

おちの所の1ヶ所に血が出ていた。

一番衰弱がひどい秋元上等兵は、他のアメリカ水兵に抱き起こされていた。

我々は直ぐに銃をかまえた水兵たちの乗っている発動機艇に乗り移らされたが、小山伍長はこの時、喉が渴いていたのか、急に、「ウォーター、ウォーター」と叫んでいた。

我々三人を乗せた発動機艇は、先ほど見えた軍艦(後年出会ったそのとき我々を助けてくれたブレイ氏の説明によると、駆逐艦ニコラス号)へと近づいていく。小山伍長は、咄嗟に、私には「山下太郎」、秋元上等兵には「秋田進」、自身は「木下一郎」という変名を使い、部隊の使命も「特攻でなく魚をとる部隊」だと話すようにと打ち合わせた。敵兵達は、銃を構え直して、小山伍長に(喋るな)というように、何か言っているにらみつけた。

間もなく軍艦の舷側に横づけになったので、これに乗せられるのかと思っていたら上と下で何か話し合っていたが、大きなコップに水を一杯入れたのを下ろして我々に飲ませてくれただけで、また動き出して、他のもっと大きな軍艦(これも後日ブレイ氏の説明によれば、巡洋艦フェニックス号で、後にアルゼンチン

に売却されたとのこと)のそばに横づけになって、我々を担架にのせて吊り上げた。

我々は、担架にのせられたまま、艦底へ運ばれ倉倉のような所へ、小山伍長は一人用の狭い場所へ、私と秋元上等兵は隣りの場所へと分けて入れられた。

あまりの境遇の急な変化に、ただぼんやりして横になつてみると、日本語の上手な米軍の将校(ジョン・H・ブレイ氏といい、後年NHKテレビ「私の秘密」の番組に、ベイリー氏と共に出演した)が来て、水兵にいろいろ指図しながら、服を取り替えてくれ、水も飲ませてくれた。

それから、別の室に連れて行かれて、いろいろ聞かれた。その時、始めて、今日が二十三日だと聞いて、二十日間も殆ど何も食わずに漂流していたことを知って、我ながら驚いた。また、米軍が、すでにルソン島に上陸したことも聞かされて、我々の部隊の活躍は、どんなだったろうかと思つた。

食事は、水兵のものと同じらしく、菓子やコーヒの付いた立派なものを出してくれたが、体の衰弱がひどすぎるのか、何も食べる気にならず、二口、三口食べただけだった。

しばらくすると、先刻の将校が来て、新鮮な空気を吸わせて、歩く練習もさせてやろう、と言つて、番兵をつけて、我々を甲板へ出してくれた。艦は高速力で進んでいるらしく、強い潮風がともに体に吹きつけて、吹き飛ばされるか、と思うほどだ。甲板には多勢のアメリカ水兵がいて珍しそうに我々を見ていた。

吹きとばされないように、足を踏みしめて、まわりを見ると、左右前後に、大きな艦艇が白波を立てて進み、となりの空母から飛び立つたらしい哨戒機が秋のトンボのように何機もブンブン飛んでいる。すごい大艦隊だ。

(さっき話聞いた、ルソン島上陸部隊の増援軍だろうか、なんとか早く日本軍の航空部隊が見つけて撃沈してくれ)と心の中で祈つた。

散歩は五分ぐらいらしく、間もなく番兵が帰るようにと、促した。

倉倉は二十四時間電灯がついていて、眩しくて眠れない。うつらうつらしているだけである。それと艦底だから、風が全然こないで、じつとしていても汗がにじみ出てくる。午前、午後の二回の散歩が待ち遠しかった。

食事は二度目から食べられるようになった。

三日目になつて、尋問した将校がやつてきて、我々三人に「営倉から出るように」と言つた。殺されることを覚悟で、彼の後について行つた。番兵や食事の世話をしてくれた水兵が、何か言つてにらみつけて両側に立っている。

我々が出た所は、毎日散歩した所とは違ふ甲板らしかった。

そこには、もう一隻の大きな船が横付けになつていて、盛んにクレーンで荷物の積み替えをしていた。(いったい、どうするんだろう)と思つていと彼らはクレーンに大きな袋をつけて、私をその袋に入れた。そして、我々に、「君たちは、これからあの輸送船に移されてある島へ送られる。そこには君達の仲間が多勢いるよ。では、さようなら」と言つて手を出した。(彼らは、我々を殺さないのか)気がつくくと、私は急に彼らに親しみを感じて、「グッドバイ」と、彼の手をにぎつた。

輸送船に移された我々は、途中、発動艇で、ミンドロ島に送られて、海岸に近い営倉で一晩留められた。

ミンドロ島では、まだ、奥地で戦闘が続いているとの事であつた。そこでも、再び尋問を受け、翌日、我々はミンドロの仮設飛行場から、米軍の郵便物輸送機

でレイテ島へ送られた。

レイテ島には、既に、捕虜收容所ができていて、島を守備していた十六師団と満州から移動して来た第一師団の兵や撃沈された海軍の艇の兵士たちが收容されていた。

レイテ島の收容所は、椰子の木の幹を柱として利用して、野性の太い竹と、ニツパ椰子の葉で屋根を葺き、壁を編んで、幅十五メートル長さ二十メートルの大きな日本式の建物を建て、その中に米軍の組立寝台を、二十台置いて各自がそれを利用して生活していた。

周囲は、高さ十メートルぐらいの鉄条網のバリケードで囲まれていた。

食事は、米軍から支給された材料を使って捕虜仲間が炊事をしていた。

米軍の軍医の下に、捕虜の中の衛生兵が集つて、医務室を開いて、捕虜の病人や怪我人の診療をした。

「作家大岡昇平氏(「レイテ戦記」著者)も、そこでの捕虜の一人で一時、この医務室で療養していた。」とは小山伍長の話だ。

收容所は、戦争の進展とともに、セブ島や、そのほかの島からの捕虜も送られて来て人員が増えて、我々の奉仕作業で收容所は、数ヶ所に増設された。

レイテ島は、オーストラリアと、前線の間であり、物資の中間補給基地になつていたので物資は割合豊富で、我々がタクロバン港での食糧や衣料の荷役作業に出るようになった。二週間に一回位は、演芸大会も開かれるようになった。

竹を割つて、絵を書いて手製の麻雀牌を作つて、作業に出ない日は、米軍の兵士から貰つたトランプやその麻雀で遊んだ。

やがて、八月十五日の終戦の日。米軍キャンプでは、サイレンが鳴り渡り、米軍の兵隊は、口々に「ウォー イズ オーバー」(戦争は終わった)と叫んで喜んでいった。

私たちは、終戦になつても、すぐには帰国できず、先ず、各地の島からの捕虜の集結が始まつた。

捕虜の送還は、十二月から始まつたが、私は帰れず、残留組にまわされた。理由は戦争中に現地人に危害を加えたり、暴行し、これを受けた現地人が米軍に依頼し、旧日本兵の中から犯人を探すため、山下・山本・山田などの姓の者が容疑者として残されたとわかつた。

その後の取り調べで、容疑は解けたが「帰る船がない」ということで、他の島からレイテ島に集結してきた人たちの炊

事を賄う班に編入され、米兵監視の中で  
の外での作業からまぬがれ、気楽な作業  
で日々を過ごした。

二十一年四月になり、再び乗船が始ま  
り、今度こそ日本に帰れると思つて乗船  
した所がマニラ港。

どこへ行くのかと思つていたら、帰国  
ではなくて、マニラ郊外の米空軍基地ニ  
コラスフィールド近くの、「第十六キャ  
ンプ」で、再び作業することになり、広  
い空港外まわりの側溝掘りのつらい作業  
が毎日つづいた。

二十一年十二月になり、再度、乗船が  
決まり、(今度こそは、日本に帰れる)  
との情報。年末に乗船、二十二年元旦、  
名古屋港に入り上陸。引揚援護局での調  
べがすみ、二日午前中、復員証明書と金  
いくらかを貰つて、なつかしい我が家に、  
三年ぶりで帰ることができた。

こうして、フイリピン戦線で、基地転  
進の移動中二十日間太平洋漂流、それに  
耐え、運よくアメリカ軍に救われ、命拾  
いし生還できた。生かされていることに  
感謝でいっぱいである。亡き戦友の靈に  
報いるためにも、余生を国家社会のため  
に尽くさなければと、日々心に誓つてい  
る。

## いまはなつかしい南シナ海

恩人の米兵と再会

◇神奈川新聞(横須賀・湘南版)

昭和三十八年八月七日(水)

### 戦争中救われた特攻兵

十八年前の昭和二十年一月、比島沖の  
南シナ海で特攻艇の機関部の故障のため  
二十日間も漂流していた三人の日本兵を  
助けた米駆逐艦ニコラス号の乗組員で、  
現在米海軍横須賀基地の米空母コンス  
レーション号に乗組んでいるF・ベイリー  
准尉(四二) 当時ニコラス号乗組員の  
兵曹Ⅱはこの三人の日本兵をさがしてい  
たがその願がかない、六日午後コンス  
レーション号で四人が感激の再会をし  
た。

この三人は、秋元軍治さん(四一)・  
当時陸軍整備上等兵、浜楨人さん(三九)・  
当時陸軍特別幹部候補生伍長、小山栄一さん  
陸軍特別幹部候補生伍長、小山栄一さん  
(四五)・陸軍衛生伍長ら。

ベイリー准尉が忘れられない記憶は、  
米駆逐艦が日本兵の救助に向かったとき  
特攻艦にいたいちばん若い兵士がいきな  
り腰の剣をぬいて自分の腹に突き立て  
「切腹自殺」を図ったこと。この自殺は  
どうにか止めさせることができたものの、  
日本人のハラキリの所作に出会った准尉  
は強いショックを受けるとともに古いサ

ムライの精神に感動した。

ベイリー准尉はたまたま空母コンス  
レーション号でこんど横須賀にきたので、  
この機会に当時の若い兵士ら三人が元氣  
で暮らしているかどうか、基地報道部を  
通じてさがしていた。(ベイリー氏が毎  
日新聞の小さな囲み記事で我々を捜して  
いる事を小山氏の次女が見付けたのが切っ  
掛けになって昭和三十八年(一九六三年)  
八月五日NHKの「私の秘密」の中でベ  
イリー氏、ブレディ氏、浜 楨人氏、秋  
元 軍治氏と私の五人が対面することが  
出来た。アナウンサーは八木治郎氏だっ  
た。)この願いは新聞を通じて三人に届  
き、五日夜NHK「私の秘密」の番組に  
よって十八年ぶりの対面がかなえられた。  
あわただしい番組のうちに空母訪問の約  
束が結ばれた。六日午後二時すぎ空母の  
タラップ前で待ちかねたベイリーさんと  
会い三人が準備してきたケース入りの日  
本人形二体がベイリーさんに贈られ、お  
返しに空母のメダルなどが三人に手渡さ  
れた。このあと艦長室で通訳をまじえた  
一行の話がはずみ、お互いのかつての憎  
しみは新しい友情にとつてかわつた。  
三人の話だと南シナ海を漂流したのは  
二十年一月三日夜で十五隻の特攻艇は比  
島コレヒドールから対岸の基地へ移動命

令で夜にまぎれて出発。舟艇は別の一艇を引いていたために列から遅れたうえエンジン故障で漂流を始めた。この艇はベニヤの板張り、長さ五メートル、幅二メートル、乗員定員は一人（出撃時）自動車のエンジンつきというしろ物。曳航艇は切り捨てたが、二十日間、水筒三本の飲み水、カンパン一袋、牛缶一個、それと医療袋だけ。魚やアホウドリを食べ、一日一回襲うスコールを飯盒に溜めて飲んでしたが、すっかりやせ細っていた。そしていつの間にか米機動部隊の真ん中にまぎれこんでいたところ、駆逐艦ニコラス号のベイリー准尉に救助された。切腹しようとした浜伍長は当時二十歳、巡洋艦ホニックス号（旗艦）では、マツカーサー元帥もこのいきさつを見ていたという。そしてジョンブレディ中尉（現在神戸在住宣教師、）の調べをうけ、ミンドロとレイテの收容所を経て同年暮れから翌年までに帰国することができた。浜さんは、ヘソの上にも傷跡がのこっているが、すんでのところミイラになるはずが生き長らえたのだから、今度は平和のために尽くしたいと感激を語っていた。



浜楨人

秋元軍治氏

八木治郎アナウンサー

通訳

ベイリー氏

小山栄一氏

ブレディ氏

## 元特攻隊長・堀山久生さんを偲ぶ

会員 加藤 拓

陸軍士官学校五七期出身で、特攻第一九四振武隊長だった堀山久生さんが三月二一日、満九十六歳で逝去されました。

堀山さんには大学院で陸軍航空特攻隊の研究を始めて以来、大変お世話になりました。そこで、多くの方に足跡をお伝えしたく、紹介させていただきま

す。なお、堀山さんの足跡については、ご著書の『館林の空』（非売品、二〇〇二年）、「特集 特攻インタビュー（第六回）」

「陸軍航空特攻 堀山久生氏」本会報第八九号（二〇一一年）二五〜三八頁、「陸軍航空特攻インタビュー 二〇一〇・四・一〇 堀山久生」「特攻 最後のインタビュー」制作委員会『特攻 最後のインタビュー』（ハート出版、二〇一三年）三一〜三四二頁に詳しく掲載されています。

## 出会い

もう一四年前になりますが、立教大学大学院に在学中、特攻隊関係者が多く所属していた首都圏明野会の冊子を偶然見つけ、すぐにお手紙を出したのが堀山さんでした。平成一八（二〇〇六）年一

月二九日に初めてお会いした時は、わざわざご自宅の最寄り駅まで迎えに来てくれ、取材中もメモを書いてくださるほど気さくな方でした。武家の末裔かつ陸軍軍人の次男だったこともあり、士官学校を志したところからお話は始まりまし

## 士官学校五七期生

た足跡は、戦争末期の陸軍航空の苦境を如実に表しています。パイロットが急激に不足したため、航空士官学校入学者だけでは足りず、陸軍士官学校の地上部隊から航空に何度も回しています。士官学校在校中に百二十人を航空士官学校に転校、卒業後に四百人を航空に転科、さらに少尉任官後にも二十人を転科させた結果、両校合わせて二千人以上の卒業者のうち、航空兵科が過半数を占め、初めて地上部隊の数を超える状況となりました。

堀山さんはこのうち、士官学校卒業後に転科した「二次転」「座間転（※陸軍士官学校は当時、神奈川県座間市にあった）」組で、野砲兵から戦闘機のパイロットになりました。もともと予科士官学校入校時に航空を希望していました。胸で肺活量が少なかったため、一度諦めた道でした。

## 特攻志願の理由

昭和一九（一九四四）年秋以降、陸海軍の航空部隊で特攻が始まり、パイロットの間で志願の気運が高まります。堀山さんは以下の三つの理由から特攻を志願したといえます。

- ① 陸士卒業式の閲兵にあたり、昭和天皇から挙手のご答礼を受けて、期待に応えようと「一死報国」を誓ったため。
- ② 陸士は現役将校の養成の場であり、軍の中心たるべき存在なので、特攻はいの一番に志願すべきだと考えていたため。
- ③ 昭和二〇（一九四五）年初頭ごろ、陸軍主計中佐だったお父さんより夕食の際、陸士時代の成績不振や航空転科後の度重なる事故を叱責され、「サボってすみません。このままでは情けないので、特攻で死に花を咲かせて償います」と宣言したため。

①と②は納得しましたが、③は大変意外で驚いた記憶があります。③の宣言をした時、お父さんは何も言わなかったのですが、横にいた将校夫人のお母さんは心中穏やかでなかったでしょう。後に堀山さんが特攻隊長に決まったと知った時、「戦闘機乗りなのに一度も邀撃させないまま、特攻に出すとは何とむごい

のか」と激怒。戦後も「お前が特攻で死ぬことがあったら、お父さんを一生許さなかつたと思う」と話したそうです。堀山さんは「素直に父に謝れば良かったものを、余計な口答えをしてみました。若気の至りで誠に親不孝なことをしてみました」と終生悔いていました。

### 「熱望」でなく「希望」に〇

堀山さんに希望調査が初めてあったのは、同年一月、明野教導飛行師団の天竜分教所（現静岡県磐田市）にいた時のこと。〇を付けたのは「熱望」ではなく、「希望」でした。実は二度の着陸失敗と

空中接触で飛行機を三台も大破させていたため、「必要な時になれば出番が来るだろう」と考えたそうです。

この時、四十人余りの同期生が全員特攻を志願したため、教官から「がっかりした。貴様たち全員特攻で死んだら、誰が戦闘隊を継ぐのだ」と大目玉を食らったといいます。結局この時は選ばれず、三月の再調査を経て、五月上旬に下館（現茨城県筑西市）の第一六飛行団に異動となりました。

### 特攻隊になるまで

堀山さんは晴れて特攻隊員になれると思いい、同期の室山五男さん、松田二男さ

んと三人で下館に行きます。すると、到着するや、「特攻隊長要員なのに、着任が遅いうえ、身辺整理をしていないとは何事か。すでに編成は進んでいるから、あと一人いれば足りる」と怒鳴られ、室山さん（後の第一九〇振武隊長）を残し、松田さんと堀山さんは東京・市ヶ谷の第三〇戦闘飛行集団司令部に向かうことになりました。ところが、そこでも「編成は終わった。明野へ帰れ」と言われてしま

まいます。ならばと、松田さんが名簿を確認したところ、隊長が欠員の部隊を二つ見つけ、交渉の上、そこに編入してもらうことになりました。それが成増（東京都板橋区）にあった四式戦闘機「疾風」六機六人の第一九四振武隊です（松田さんは第一九三振武隊長）。

### 特攻隊長

こうして、第一九四振武隊は五月二三日に編成され、六月三日に群馬県の館林に移ります。「深山の桜のように人知れず咲き、散っていきこう」との思いを込め、「深山桜隊」と名付けました。堀山さん自身は九月二〇日頃に北九州へ移り、同

月下旬に突入するという内示を受けたため、辞世の句は「秋空や 純忠の義に

雲越えし」としたためました。忠義にあって堀山さんの人柄がにじみ出ている、晩年のご本人も気に入っているようでした。

隊長になった堀山さんですが、部下の少年飛行兵出身の伍長四人に鉄拳制裁を加えたことがあったそうです。ほりまみれの銃剣を見つけて激怒し、「軍紀がたるんだ。貴様らは銃剣の手入れもしてらんのか。伝統ある少年飛行兵として恥ずかしくないのか」とその場で殴りつけたのです。以後、彼らは手入れをきちんとするようになり、「さすがは現役下士官と感心した」と振り返っていました。

一方で、特別操縦見習士官一期の上田克彦少尉が六月一〇日に副隊長として着任すると、五歳年上でお兄さんと同い年の年長者に敬意を払い、少飛の四人を預けました。また、写真撮影の趣味があり、カメラを常に手にして、よく部下らの写真を取ってあげたといいます。ご著書の「館林の空」には二五〇枚以上の写真が収録されているのは、そんな理由からで、当時から厳しさの中にも愛情があり、気配りができる方だったように感じました。

### 体当たり方法を意見具申

部下たちの操縦の腕は優秀だったそう

ですが、いかんせん隊員の飛行時間は上田少尉の二〇〇時間を筆頭に、堀山さんが一五〇時間、少飛の四人は九〇時間ほどと経験不足は否めません。特に、乗機である重戦闘機の疾風の操縦は大変だったようで、少しでも特攻の効果を上げる方法はないかと、堀山さんは知恵を絞ります。そのうちに効果的な体当たりの方法を考えるに至り、参謀に意見具申しました。

具体的には、超低空から敵艦船に近づき、その船底目がけて、水中爆発で二五〇<sup>\*</sup>爆弾二発を炸裂させるというものです。空中にエネルギーを逃がさず、魚雷攻撃に似た効果を期待したそうです。

### そして終戦

しかしながら、前進や出撃の機会はずれず、そのまま館林で訓練中に八月一日の終戦を迎えます。玉音放送を聞き終えると、その意味が分からず立ち尽くす堀山さんの傍で、ご同期で第一八六振武隊長の落合成郎中尉が突然わっと泣き出しました。「戦争に負けたのか。しまつた。死に損なった」と周囲が灰色に見えた時、館林集成教育隊長の酒井剛少佐が「これは祖国再建に力を尽くせという天皇陛下の命令である」と訓示したそうで

す。これによつて場は収まり、後に徹底抗戦の話聞いても誰も応じなかったといひます。

堀山さんは戦後、慶応大学法学部を経て大手商社に就職。酒井少佐のお言葉を胸に、戦後日本の再建に貢献し、七十七歳まで働き続けました。その間、職場などで特攻隊長時代の体験談を聞かれれば、「恥じることなど何もない」という思いで答えてきたそうです。その反面、「僕は出撃までいっていいから、特攻隊長として半人前。その自分が偉そうに特攻を語るべきではない」という気持ちもあり、複雑な心境だったことと思います。

### 居酒屋での思い出

お話を伺った後、別れ際に居酒屋で一献酌み交わしました。私が特攻作戦の非情さや軍上層部の無責任さを批判すると、「大した苦労もしてないくせに、若造が分かったような口をきくな。陸上自衛隊に体験入隊でもしてから言え」と厳しく叱責されました。酒の勢いもあったかと思いますが、まるで軍人に戻ったかのよう、に鬼の形相だったのを今も覚えております。

その直前、堀山さんは昭和一八(一九四三)年一〇月、雨の降る神宮球場での

学徒出陣のニュース映画を士官学校の大讲堂で見て、「学問をしようとしているのに気の毒だ」と、彼らの境遇にひどく同情したことを教えてくれました。一方で当時、旧制高校や専門学校に進学できるのは十数%だったといい、「敵国もすでに志願して戦場に立っている学生がいて聞く。わが国だけ甘えは許されない」とも感じていたそうです。

激怒された理由を詳しく聞いたことはありません。ただ、当時の苦境を肌で感じていたからこそ、平和ぼけした現代の視点で当時の体制を批判するのではなく、特攻に突き進みざるを得なかった時代背景を理解した上で言つてほしい、という趣旨だったのではないかと今更ながら考えています。

### 続く交流

平成一九(二〇〇七)年春に私が就職して以降も交流は続きました。当頭彰会による靖国神社の特攻隊合同慰霊祭や東京・世田谷の特攻平和観音年次法要でお会いするたび、終了後に喫茶店でお茶を飲みながら談笑いたしました。この頃、食道がんや心臓疾患を抱えながらも、決して健康不安などの弱音は吐かず、「迎えが来る時は来るさ」と達観したご様子



だったのを今でもよく覚えています。平成三〇（二〇一八）年には、五月に「陸軍航空特別攻撃隊 各部隊総覧」という全二巻の資料集を作って贈呈し、七月にご戦友の話を伺いにご自宅を訪問いたしました。すると、翌年の年賀状に「私は貴兄のように若い語り部を持ち本当に幸せです」とあり、目頭が熱くなりました。

### 遺言

お会いするたび、遺言のように何度も私に語りかけた言葉があります。「国家危急存亡の際、若者が国を守って死ぬ。武士はその運命を甘受せねばならぬ。民族、国家を護らねば、国は滅亡するよ」。戦後三六年経った昭和五六（一九八一）年生まれ私には、その意味が今ひとつ理解しきれずにおりました。

堀山さんが亡くなられた後、わずか半年の間に新型コロナウイルスの感染拡大で東京オリンピック・パラリンピックの延期、緊急事態宣言の発出、総理大臣の交代など、時代はめまぐるしく動きました。そんな中、堀山さんが伝えたかったのはこういうことではないか、と考える機会がありました。

テレビや新聞記事で災害ボランティア

やインターネットでの資金集めに奔走する若者を見た時です。「国を守って死ぬ」というほどではないかもしれませんが、まさに国が苦境に立たされた時、世のため人のために貢献しようと立ち上がった彼らの姿が、戦時中の特攻隊員たちと重なって見えました。年長者の一人として大変心強く、将来を期待せずにはいられませんでした。

その一方で、来年で不惑を迎える、責任ある世代として、二度とこのように将来有望な若者を特攻で死なせることがあつてはならないという気持ちも増しました。そのために何をしなければならぬか、これからも模索していきたいと考えています。

### 訃報を聞いて

堀山さんが亡くなられたと聞き、奥さんにお電話しましたところ、最晩年は「二十歳そこそこで死んでいった仲間の四倍以上も生きられ、幸せな人生だった」と振り返っていたと伺いました。ひ孫さんにも恵まれ、「久生」という名の通り、大正、昭和、平成、令和の時代を精一杯生き抜き、天寿を全うされたのではないかと改めて思います。

末尾になります、心より冥福をお祈

りいたします。今頃は戦死した仲間の方々靖国神社で酒でも酌み交わしていらっしやいますでしょうか。どうか愛する祖国の行く末を天国より見守りくださいませ。長い間、本当にお疲れさまでした。そして、ありがとうございます。お会いできたご縁に心より感謝申し上げます。合掌。

### （経歴）

- ・大正一二（一九二三）年六月 三重県宇治山田市（現伊勢市）生まれ。
- ・昭和一九（一九四四）年四月 陸軍士官学校卒業（五七期）。野砲兵から航空へ転科。
- ・同年九月 明野教導飛行師団付。
- ・同二〇（一九四五）年五月 第三〇戦闘飛行集団隷下で成増編成の特攻第一九四振武隊長に。
- ・同年六月 館林へ移動。館林集成教育隊で四式戦闘機・疾風を受領し、特攻訓練を開始。中尉に昇進。
- ・令和二（二〇二〇）年三月 逝去。



「桶川飛行学校平和祈念館」開館式  
理事 白田 智子

令和2年8月4日10時30分、猛暑の中  
の式典が開始された。コロナウィルスの  
影響で縮小した式典になった。

桶川市長、議長、県議、教育長、国会  
議員、社会福祉協議会会長、航空自衛隊  
第4術科学校校長兼熊谷基地司令空将補小  
野打泰子様、桶川市遺族連合会会長兼  
〇法人「旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ  
会」桶川市団体役員代表の方が出席して  
下さった。ものつくり大学、一般財団法  
人埼玉県遺族連合会の方々も参加された。  
小野市長様の挨拶があり、テープカット  
が行われ式典が終了した。

その後、兵舎棟の中に入ると、(公財)  
特攻隊戦没者慰霊顕彰会から贈られた立  
派な生花が飾られ、ご来館の皆様を出迎  
えていた。

桶川飛行学校平和祈念館(旧熊谷陸軍  
飛行学校桶川分教場)は現存する旧陸軍  
飛行学校遺構としては、全国唯一の大変  
貴重な建物群で、今から83年前、昭和12  
年6月3日開校し、陸軍少年飛行兵の実  
技教育施設として、延べ1500〜16  
00人の飛行兵の基本教育が主に行われ  
た。桶川分教場で学ぶ生徒は全国から集

まり、共同生活を送っていた。生活を営  
む学校施設として、守衛棟、兵舎棟、便  
所棟、車庫棟、鉄筋コンクリートの弾薬  
庫等が整備されていた。

昭和20年に閉校となり、同年3月末特  
攻要員の訓練施設として使用された。終  
戦後、分教場にGHQが1年ほど駐屯し  
ていた。その後、大陸から引き揚げて来  
られた方達などの市営住宅として市が国  
から借り上げ「若宮寮」の名称のもと、  
一時は、64世帯、300人ほどが暮らし  
ていた。平成19年3月に最後の住人が転  
出され、その後、「旧陸軍桶川飛行学校  
を語り継ぐ会」により保存に向けた活動  
が始まり、平成21年に同会から1400  
0筆の保存活用についての要望の署名が  
提出され、市は平成22年に国から土地を  
購入した。平成25年には有識者からなる  
検討委員会から「提言」を受けて、平成  
26年から整備、保存活用に向けた各種調  
査、検討を重ね、平成27年「ものつくり  
大学」と官学連携協定を締結し、本格的  
に復原整備に取り組んだ。建物は平成28  
年2月29日市有形文化財(建造物)に指  
定された。

平成19年以降の保存活動に、多くの方々  
の関係者の皆様にお力添えを頂きながら  
今日の日を迎えることが出来ました。長

い日々でありましたが、戦後75周年の節  
目の年に、復原された一群の建物をご覧  
いただくことにより、この場所で何かを  
感じていただき、戦争のない平和が未来  
永劫続きますように、そして平和の尊さ  
を発信できる施設として活用して頂き  
たいと願っています。



テープカット 後方は「兵舎棟」

## 連載山ある記12 群馬県「白砂山」

会員 池田 康博

今上陛下が皇太子時代に登った山の一つである「白砂山」に登った。白砂山は群馬県の最奥部、新潟県と長野県の県境に位置し野反湖に登山口がある。

野反湖はダム湖で、ここから流れ出る水は「魚野川」となり豪雪で有名な秋山郷へと流れている。また、白砂山は、日本二百名山の一つで、標高は二千四百四十メートルと決して高くはないが、登山口から6.4kmもあり、二つの山と幾つかのピークを越えなければ着かないことから健脚向きの山として知られる。



白砂山

八月下旬、野反湖キャンプ場のバングローに一泊し、翌朝6時12分に白砂山登山口を出発した。ここは標高千五百二十五メートル、少し登った後、下りと

なり、沢を二度渡ってから本格的な登りとなった。最初のポイント「地蔵峠」は、標高千八百十二メートルの地蔵山へと向かう途上の登山道で、切明温泉への分岐である。ここを6時56分に通過し、地蔵山を過ぎてアップダウンを繰り返しながら、次のポイントである「堂岩山」へと進んだ。

堂岩山は標高二千五十一メートル、山頂には標高差百メートル以上はあるのかという急坂を登って8時43分に登頂。ここまで約二時間半、体力もかなり消耗した。小休止の後、少し進むと今度は急な下りにかかるが、ここをやっと白砂山を遠くに望むことができた。

ここからは前方の小ピーク（猟師の頭）まで細い一本の登山道が伸びる気持ちの良い稜線歩きになる。小ピークを越えても、なおアップダウンを繰り返して行くと、いよいよ白砂山と対峙する位置にたどり着いた。大きな山体の稜線上に、山頂に向かう一本の細い登山道が立ち上るように延びているのが見える。やっと目指す山まで来たかと思いつきながら下って行ったが、白砂山の山体に取り付くという地点から急登が始まった。小休止を繰り返して、上を見上げては「あそこが山頂に違いない」と元気を奮い起こしながら登り切ったところ、まだ先があることが分かり、落胆しつつも「もう少し、もう少し」と言い聞かせ、10時20分、ようやく山頂にたどり着いた。コースタイム3時間40分のところ、4時間8分を要した。山頂は狭いものの、上信越の山並みが三百六十度見渡せる、はずであったが、生憎ガスがかかっていて堪能するまでには至らなかった。10時35分以下山を開始、堂岩山を過ぎた地点で昼食を摂り、



白砂山山頂

さらに下っていると雨になった。にわか雨だろうと思ったが雨はだんだん本降りとなり、沢の渡渉が心配になるほどになってきた。その沢も多少増水していたが、なんとか間に合い、ずぶ濡れになって登山口の駐車場に帰り着いたのは3時10分だった。昼食の時間は含むものの、下山にも4時間25分を要した。しかし、下山後、雨も止み、疲れも少し取れてみれば、「白砂山？ いやあ、登り甲斐、歩き甲斐のあるいい山だったなあ」という印象が変わっていた。

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



● 爽やかに 笑顔残せし 征く君の

かくたる想い 我らうけつぐ

● ぬばたまの 夜の衣をかえしても

会いたき君よ 何処に眠る

淳子

● ツクヒンヨー ヒグラシの声 秋近し

よみびとしらず

● 友偲ぶ 盃の中 冬の月

● 頭取の 詫びることばは 空手形

井下駄マスオ



## 事務局からの連絡事項

## 一 特別攻撃隊全史の第2版出版について

平成20年に、それまでの「特別攻撃隊」(平成2年初版、平成15年4版)に、海軍の第2艦隊沖繩出撃や陸軍の空挺部隊(義烈空挺以外)等を準特攻として加えて「特別攻撃隊全史」が出版されました。その後平成23年までに判明した事項を「追補版」として追加して参りましたが、このたび、それ以降これまでに判明した事項を反映した第2版を出版することとなり、現在修正作業を行っております。

修正内容は、追補版の本文への記載とともに、追補版発行以降に皆様から寄せられた英霊に関する情報の反映、及び、各地の慰霊碑等を記載した「顕彰譜」のカラー化と関連情報の最新化等で、装丁も新しく、本年11月末に発刊する予定です。

12月以降最新版をお届けできるよう準備いたしますので、ご希望の方は事務局にお問い合わせください。

今後も「特別攻撃隊全史」が、特別攻撃隊に関する中心的書籍として皆様のお役に立てる様、最新の情報を収集して参る所存ですので、引き続き皆様のご協力をお願いいたします。

## 主要修正項目

- 英霊に関する氏名・出身等の修正
- 震洋戦没者の出身地の記述追加
- 陸軍航空の発進基地の記述追加
- 空挺部隊のうち「薫空挺隊」と「高千穂降下部隊」の準特攻から特攻への変更
- 各地慰霊碑の関連情報の最新化
- 特攻使用航空機の写真掲載
- 二 会報一三二号(8月号)記事の訂正について

48ページに「図書紹介」として左記の写真集4点をご案内しましたが、これらの写真集は既に取り扱っていない旨の通知を受けました。会員の皆様には大変ご迷惑をお掛けしましたが訂正させて頂きます。

- ① 第55振部隊隊長黒木國雄少尉の写真集

- ② 同右のご家族、愛機「飛燕」、隊員との写真集

- ③ 神風特別攻撃隊皇剣隊隊員の林和博少尉の写真集

- ④ 12期甲種飛行予科練習生北野和夫一飛曹の写真集

## 三 住所等の変更について

現在、会報は、メール便にて皆様にお

届けしています。メール便は、あて先が少し違っただけでも事務局に返送され、お届けすることが出来ません。

実は、毎号、十四〜五通が「宛先不明」で返送されており、郵便局から再度発送の事務を行っております。

転居又は地番等が変わった場合には新しい住所名を、また、同居されるようになった場合は、「○○様方」まで必要となりますので、電話やメール、FAXなど、事務局にご連絡下さいますようお願い致します。

## 四 年会費及び寄付金の税額控除

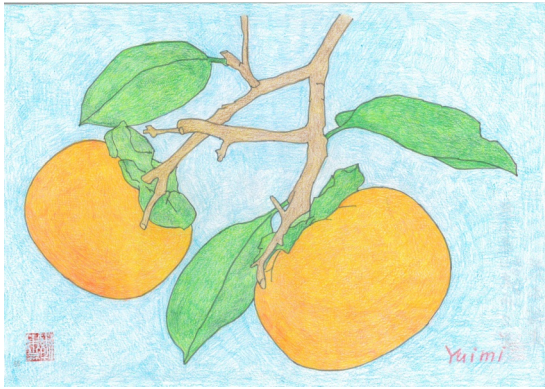
当顕彰会は公益財団法人として認定されていますので、年会費も税制上は「寄付金」となります。このため、年会費を確定申告する事により税額控除を受けることが出来ます。

確定申告に必要な「寄付金受領証」と「税額控除に係る証明書」が必要な方は遠慮なく事務局へご連絡下さい。

なお、年会費も含めて一万円以上の御寄付をされた方には、ご連絡の有無に関係なく送付しています。

税額控除についてご不明の方は事務局にお問合せ下さい。





宮本 忠 (2・8・9)	福井 方幹 (30・4・14)	大賀 龍吉 (1・6・5)	豊田 志げ (2・1)	角 武彦 (2・4・12)	土屋 六郎 (2・7・22)	大井手誠一 (2・8・18)	金子 勲	内山 正義 (1・6・21)	広瀬 長利 (30・10・31)	高石 近夫 (1・11・11)	根木 悦子 (2・5・8)	武田 悦光 (2・8・6)	鳥山 隆 (1・11)	新 梨渦	山 梨	愛 知	大 阪	奈 良	ご冥福をお祈りします。
--------------	-----------------	---------------	-------------	---------------	----------------	----------------	------	----------------	------------------	-----------------	---------------	---------------	-------------	------	-----	-----	-----	-----	-------------

**会員ご入会のご案内**

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

○ URL: <https://tokkotai.or.jp>

QRコード



**ご投稿についてのお願い**

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。が必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛てとして下さい。  
〒1020072  
東京都千代田区飯田橋一丁目5-7  
東専堂ビル2階  
公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会  
電話 03-5213-4594  
FAX 03-5213-4596  
E-mail jimukyoku@tokkotai.or.jp